

## 「客観主義」の胎芽としてのアイン・ランド『水源』

藤 森 かよこ

### 要旨

アイン・ランドが提唱した思想「客観主義」(Objectivism)の胎芽は、1943年に発表された『水源』(*The Fountainhead*)にすでに在った。「客観主義」は、マルクス主義やリバータリアニズムと同じく、西洋近代啓蒙思想の発展形のひとつである。ランドは、理想的人物を描くことが書く目的だと明言している。その言葉が示すように、『水源』の主人公は、ルネサンスや宗教改革や啓蒙思想が生み出した「近代人」という人間モデルの美質のみを臆面もなくロマンチックに体現する人間として造形されている。その意味で、『水源』は「近代讃歌」である。同時に、自由と個人主義と自己の幸福の追求を是とするアメリカ的価値観と、国家への奉仕と集団主義と利他主義を是とするソ連的なものの相克を描いた「冷戦期のアメリカ国民文学」である。また、ユダヤ人であったことへの不安と恐怖と願望が凝縮された小説でもある。加えて、第一波フェミニズム運動と第二波フェミニズム運動の端境期に、破天荒なヒロイン像を提示したプレ・フェミニズム小説でもあった。しかし、『水源』には、1957年に出版された『肩をすくめるアトラス』に示唆されているような「邪悪な社会における善と正義の生き残り」という問題への解決は提示されていない。理想的人間像を提示するのならば、そのような人間の生存を可能にする社会システムの提案と構築が必要とされる。文学だけの世界にとどまてはいられない。どうしても政治が問題になる。アイン・ランドが「客観主義」という思想を生成した過程には、『水源』創作時の苦い認識が関与していた。

キーワード：客観主義，個人主義，集団主義，近代化，ユダヤ人性

### 1 はじめに

本論の目的は、アメリカのユダヤ系ロシア系女性作家および思想家のアイン・ランド (Ayn Rand: 1905-82) が提唱した「客観主義」(Objectivism) という思想の初期の形が、長編小説『水源』(*The Fountainhead*, 1943)において、いかに表出されているかを確認することにある。『水源』に「客観主義」の胎芽があることは、すでにロナルド・E・メリル (Ronald E. Merrill) が指摘して久しい (Merrill, 1993, 55)。本論においては、メリルの指摘をより具体的に考察する。

筆者の最終的な目的は、アメリカの政治思想史におけるアイン・ランドの布置を明らかにすると同時

に、日本人にとってのアイン・ランドの意義を指摘することにある。アイン・ランドがアメリカ合衆国で広く作家として認知され、かつアメリカの保守主義論壇に受容されたのは、この長編小説『水源』の成功によるものだった。そのことについては、すでに拙論「アメリカにおける保守主義の誕生とアイン・ランドの交点」(藤森, 2012)で言及した。

アイン・ランドが自己の思想とアメリカの保守主義なるものが似て非なるものであることを思い知る契機となった『肩をすくめるアトラス』(*Atlas Shrugged*, 1957)の物語内容と、それを貫く思想「客観主義」については、拙論「アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』」(藤森, 2013a)において論じた。アメリカの保守主義とアイン・ラ

ンドの思想の齟齬については、「アイン・ランドの保守主義批判」（藤森，2014）において詳説した。次の段階として、リバータリアニズムと混同されることが多い「客観主義」の、リバータリアニズムとの差異を確認する作業に移るべきである。

しかし、その前に「客観主義」なる思想を、より深く把握する必要がある。その作業は、前述の拙論「アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』」において不十分であったと筆者は考える。よって、本論では、「客観主義」の胎芽を表現している『水源』を再確認することによって、「客観主義」の理解により迫りたい。

本論の構成は以下ようになる。本論2においては、『水源』を、より深く理解するために作家の生い立ちにさかのぼり、『水源』創作と出版の背景を確認する。本論3においては、『水源』の具体的な物語内容を確認する。本論4においては、主要登場人物の造形に関する注意点を挙げる。本論5においては、筆者が重要と考える『水源』のさまざまな相を指摘する。本論6の結論においては、『水源』の問題点を指摘する。その問題点への回答が『肩をすくめるアトラス』執筆を通しての「客観主義」生成であったことを指摘する。

## 2 『水源』出版までのアイン・ランドの人生の軌跡

言うまでもなく、ある作家の作品や思想を理解するためには、その作家の自伝的背景を知っておくことは必須である。アイン・ランドは日本ではまだまだ未知の作家なので、その自伝的背景の紹介が、日本語で詳細になされてきたことはない。よって、本論における『水源』出版までのアイン・ランドの人生の軌跡に関する記述が長くなるのは、いたしかたない。

アイン・ランドに関する評伝は、ランドの弟子であったバーバラ・ブランデン（Barbara Branden：1929-2013）の『アイン・ランドの受難』（*The Passion of Ayn Rand*, 1986）や、ナサニエル・ブランデン（Nathaniel Branden：1930-）の『裁きの日---アイン・ランドとの年月』（*Judgement Day：My Years with Ayn Rand*, 1989/後にその改訂版*My*

*Years with Ayn Rand*が99年に出た）など、1980年代後半からいろいろ発表はされてきた。しかし、アメリカに渡るまでのロシア（ソ連）時代の彼女の状況には謎が多かった。アイン・ランド自身は、過去のことを語るのを好まなかったし、自叙伝を書き残すこともなかった。弟子や友人に彼女が語った思い出話にも様々なヴァージョンがあり、信憑性に欠けていた。

しかし、やっと近年になって、ランドの故郷であるロシアはサンクトペテルブルクでの調査に基づいて、両親の出自や親族関係など、ロシア時代のランドの状況を明らかにした研究が発表された。以下の記述のかなりが、2009年に発表されたアン・C・ヘラー（Anne C. Heller）の非常に詳細で洞察に満ちた評伝『アイン・ランドと彼女が作った世界』（*Ayn Rand and The World She Made*）に負っている。

### 2.1 ロシア革命前夜

アイン・ランドは、1905年の2月2日に帝政ロシアのサンクトペテルブルクに生まれた。34歳のゼルマン・ウルフ・ザクハロウビッチ・ロウゼンバウム（Zelman Wolf Zakharovich Rosenbaum）と、25歳のカハナ・ベルコヴナ・カプラン（Khana Berkovna Kaplan）の第一子として生まれた。ランドのロシア・ソ連時代の名は、アリサ・ジノヴィエヴナ・ロウゼンバウム（Alissa Zinovievna Rosenbaum）であった。ランドは三人姉妹の長女として育つ。

ランドの両親は共にユダヤ人である。アイン・ランドは自分のユダヤ人性について言及することはなかったが、彼女の思想を理解するには、この「アイン・ランド自身がほとんど語ることがなかった彼女のユダヤ人性」を抜きにすることはできない。この問題については、本論5.3で詳しく述べる。

帝政ロシア時代には、各地でユダヤ人居住区（ゲット）への攻撃や襲撃などの騒動が頻発した。ユダヤ人差別の風潮は根強かった。組織的ユダヤ人虐殺、撲滅という意味での「ポグロム」（pogrom）という言葉も、ロシアやポーランドでは存在したぐら

いである。

それでも、ランドが生まれた20世紀初頭には、首都のサンクトペテルブルクには、商業や医薬分野に進出し成功したユダヤ人市民層が形成されていた。当時のロシアや東欧には、公的教育機関に、ユダヤ人入学者数を、定員数の2パーセントから5パーセント、もしくは多くても10パーセントに限定する入学割当制度 (quota system) が在った。公的教育機関への入学のハンディキャップのために、ユダヤ人の向学心はより一層に刺激され、ロシアのみならずヨーロッパにおけるユダヤ人知識人層は決して薄くはなかった (鈴木, 2003, 44-45)。そのような体制の中で、ランドの父は、ポーランドのワルシャワ大学に入学し、化学や薬学を学んだのだから、その優秀さは立証される。彼は、ほんとうは作家志望であったが、母親と多くの兄弟という母子家庭を支えるために働き、大学に入学できたのは、やっと28歳の時だった。

一方、ランドの母は裕福な家庭に育った。父親 (ランドの祖父) は、ロシア軍の軍服の製造販売を一手に引き受ける仕立て業者として成功した人物だった。親類には医師、薬剤師、助産婦が多かった。ランドの母も一度は歯科医をめざしたことがあり、英語にフランス語にドイツ語など数か国語に堪能な才媛だった。ランドの父が、ランドの母の親類の大きな薬局に雇用されたことが縁となり、ふたりは結婚することになった。当時のことであるので、見合い結婚のようなものであった。後に、ランドの父は、妻の親類である共同経営者から権利を買い、サンクトペテルブルクの目抜き通りネフスキー通りに大きな薬局の店舗を構えた。何人かの薬剤師や従業員をかかえる大薬局だった。ランドの父も母の一族も、ユダヤ人が生きるには厳しい状況の中で、自らの勤勉さと有能さによって成功した人々だった。

そのようなユダヤ人プチ・ブルジョワ家庭に生まれたランドは、9歳まではベルギー人家庭教師からフランス語を学んだ。フランス語学習は、当時のヨーロッパの上層中産階級から上流階級の子弟の必修事項であった。その彼女をして「作家になる」と決心させたのが、母がフランスから取り寄せて

いた雑誌に掲載されていたモーリス・シャンパン (Maurice Champagne: 1868-1951) の絵物語『不思議な谷』 (*La Vallée Mystérieuse*, 雑誌掲載後に単行本化1915) だった。1914年のことだ。

この物語内容は、英国の将校が、ヒマラヤ山中にあるヒンズー教徒の謎の国で邪悪なシャーマンと戦い勝利するというものである。現在の文脈からすれば典型的な西洋白人中心主義の帝国主義礼賛植民地ロマンスである。日本で言えば山川惣治 (1908-92) の『少年ケニア』のようなものと思えばいい。主人公の軍人のサイラス・パルトンズ (Cyrus Paltons) は、長身瘦身の独立独歩の青年である。サイラスは、ランドにとって生涯にわたる理想の男性像となった。サイラスのような男性を主人公にした物語を11歳までに、少なくとも4編書いている (これらはロシア革命の混乱で消失している)。サイラスは、成人後にランドが書く長編小説の男性主人公たちの原型になった。アメリカでは、この物語は英訳され、今でも読まれ続けている。その理由のひとつは、アイン・ランドが少女時代に愛読したものである (Milgram, 2007, 177-83)。

前年の1913年には、ランドは、エカチェリーナ大帝 (エカチェリーナ II 世) の少女時代を描いた偉人伝を何度も読んでいる。エカチェリーナは、北ドイツ (現ポーランド) の貧乏貴族出身ながら、ピョートル大帝の孫ピョートル 3 世に嫁ぎ、ロマノフ王朝の血統ではないにも関わらずロシア皇帝となり、啓蒙専制君主として君臨した。この女性と、1915年に知ったジャンヌ・ダルク (John of Arc) が、少女時代のランドの理想の女性像となった。エカチェリーナ女帝もジャンヌ・ダルクも、女性に制約の多い時代に自分の人生の限界を思い切り広げた。彼女たちは、ランドが描くヒロインの原型となった。

ランドが生きた時代は歴史的激動期である。1914年7月28日には、第一次世界大戦が勃発している。恒例の6週間の夏の休暇をヨーロッパで過ごしていたランド一家は、急いでサンクトペテルブルクに海路で帰った。戦争が始まり、陸路は危険になったからだ。

同年の秋、ランドは学校に入学する (当時のロ

シアに義務教育制度はない)。1889年に創設されたストイウニン学園 (The Stoiunin Gymnasium) である。この学校の創設者は、高名な教育思想家のストイウニン夫妻 (M.N. Stoiunina & V.J. Stoiunin) であった。夫妻は、文豪ドストエフスキーの友人であり、文部省の審議会メンバーでもあった。夫妻の教育理念のもとに、カリキュラムは、当時の女子教育機関としては珍しく、人文学系科目と科学系科目をバランスよく提供していた。ユダヤ人入学者は2パーセントから5パーセントぐらいまでしか許可しなかった教育機関が多かったときに、ランドが所属したクラスでは、生徒数39名の3分の1がユダヤ人子女であった。ストイウニン学園は、いわば実験的で先進的であり、リベラルな学校だった。教師陣も選りすぐりだった。したがって授業料は高く、入学試験も難しかった。生徒にはサンクトペテルブルクの上層中流階級の知識人家庭の子女が多かった。

ランドはこの名門校において1918年までの4年間で、フランス語、ドイツ語、数学、自然科学、西洋史、ロシア文学、美術、音楽、衛生学、法学、体操、裁縫などを学んだ。成績は非常に良かった。いかに先進的な学校であろうと、当時のことであるので、ロシア正教会の教会での礼拝は生徒の日課であったが、ユダヤ人生徒は、ユダヤ教徒であることを考慮され、礼拝出席は強要されなかった。ランドは、すでに1913年8歳のときに神は存在しないと信じたと後日述べているので、この学校は居心地が良かったはずである。ただ、非社会的で友人を作らず、運動嫌いで読書と作家の真似事ばかりしている長女に対して母親は不満であった。

そのうち、ランドにも友人ができる。進歩的ブルジョワ知識人家庭で育ったオルガ・ナボコフ (Olga Nabokv) がストイウニン学園に入学してきたからだ。彼女の祖父はアレグザンダー三世治世時の法務大臣 (the minister of justice) であった。ユダヤ人の政治的権利の提唱者であったために大臣職からの辞任を求められたほどの進歩的政治家であった。父もまた法律家であり、高名な政治家であり、議会制とユダヤ人の解放を唱えるロシア立憲民主党の創立者でもあった。

オルガ・ナボコフの兄は、後にアメリカで『ロリータ』 (*Lolita*, 1955) を発表したウラディミール・ナボコフ (Vladimir Nabokov : 1899-1977) である。ランドは、知的好奇心を分け合える友人を、やっと得ることができた。ランドは、オルガ・ナボコフの邸宅を訪れ、ナボコフ家の5人兄弟に会ったかもしれない。アイン・ランドとウラディミール・ナボコフは、どちらも末期の帝政ロシアで育ち、革命期の混乱から逃げ、アメリカに帰化し、同時期に作家として名をなし、マンハッタンに住んでいた。しかし、ふたりの交友についての記録は全くない。このランドとナボコフとの数奇な接点 (もしくは渡米後の接点の無さ) と、人生の奇妙な類似についての研究もある (Johnson, 2000)。

## 2.2 ロシア革命以後アメリカに渡るまで

ランドとオルガが早熟にも政治的問題を語り合うようになる前に、ロシア社会が激変する事件が起きていた。1917年には、第一次世界大戦により、すでに600万人のロシア兵が、捕虜になり、重傷を負い、戦死していた。食料不足と燃料不足は深刻になり、労働者や農民の不満は頂点に達していた。同年2月23日には、小麦粉が払拭し、サンクトペテルブルクのパン屋がすべて閉店した。「国際婦人デー」の行進が暴徒化した。2月24日には、疲弊した労働者や兵士や学生が郊外に集結し、サンクトペテルブルクのネフスキー大通りを「皇帝を倒せ！」と叫びながら行進した。2月28日には、サンクトペテルブルク守備隊が上官に反抗した。3月1日には労働者が武装した。3月3日には、皇帝ニコラス2世が退位し、臨時政府が誕生した。政治的自由や経済的復活への希望が国民に満ち、ロシアに共和政が敷かれた。スターリンはシベリアから帰り、レーニンが亡命先のヨーロッパから帰国した。

そのような政治的変動にも関わらず、1917年の夏もアイン・ランドの家族は休暇をリゾート地で過ごしたほどには、市民生活は、まだまだ平安であった。しかし、この年の夏の休暇が、家族にとってはプチ・ブルジョワとしての最後の夏休みの休暇となった。同年9月に「ロシア社会民主労働党」、ボル

シェヴィキ (Bolshevik) は、第一次大戦の終結や工場の国有化や地主からの土地没収を公約にして、選挙に勝利した。10月25日レーニンとボルシェヴィキは主要建物を占拠し、電話線を切断し、軍を掌握し、首都を制圧した。できたばかりのロシア共和国政府は転覆させられた。2月革命によって生まれた議会制民主国家ロシアの命は、たった8か月だった。内戦が始まった。赤軍と白軍の戦闘がロシア中で始まった。

同年11月に、ランドの唯一の友人だったオルガ・ナボコフは、秘密裏にサンクトペテルブルクから南部のクリミアに、他の4人の兄弟とともに移動していた。1919年には、そこからコンスタンティノープル (現イスタンブール) 経由でヨーロッパに亡命した。オルガの父は、5人の子供を安全地帯に逃しておかねばならなかった。なんとすれば、自分自身は、ボルシェヴィキに挑み、ロシアを議会制民主主義共和国にもどすべく奔走しなければならなかったからだ。ランドは、親友がクリミアに移動し、ヨーロッパに亡命したことは、いっさい知らなかった。一方、ランドの父親は、このような馬鹿げた騒ぎは長く続かないと主張し、財産を持ってロシアから脱出しようという妻や娘の提案を退けた。しかし、その「馬鹿げた騒ぎ」は1991年まで続いたのであるが。

1917年から18年にかけて、レーニンは、労働者階級の支持を強化するために、中産階級やユダヤ人の資産を没収した。ランドの父が経営する薬局も国有化され、ランドの父は失業した。ランドの親類はすべて職を追われた。ランド一家が住んでいたアパートメントも接収され、いろいろな人々との同居を強いられた。

1918年にランド一家は混乱したサンクトペテルブルクを避け、まずはウクライナに、それから夏の静養によく訪れたクリミアに移住した。ランド姉妹3人は、そこの私立女子学校に通う。そこでランドは、初めてアメリカ合衆国について学んだ。そうこうするうちに、1921年に白軍はクリミアからヨーロッパに逃亡し、ボルシェビキの勝利は決定的となった。

1921年6月にアイン・ランドは女学校を卒業した。ランドは、母とともに、文盲が圧倒的に多かった赤軍兵士に読み書きを教えた。ここで、ランドは、自分の教師としての才能に気がついた。このようなロシア革命の激動のなかでも、あるいは不快な現実から逃避するために、ランドはフランスの作家のヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo: 1802-85) の小説などを読みふけた。特に、フランス革命を背景にしたものを読むことに耽溺した。

まもなく、ランド一家は、元サンクトペテルブルク、その時はペテログラードと改名されていた古巣に帰る。すでに首都は1918年3月にモスクワになっていた。ペテログラードに帰ってからのランドの父は働く気力を失っていた。語学に堪能な母親が教師や翻訳業で家族を養った。8月にランドは、旧サンクトペテルブルク大学のペテログラード大学に入学した。

ランドは、ロシア革命を呪っていたが、実は、革命の恩恵も受けてはいた。2月革命のおかげで、ユダヤ人も女子も大学に入学できるようになっていたからだ。ボルシェヴィキは、大学の授業料も無料にしていた。ランドの主専攻は歴史、副専攻は哲学だった。1924年までに、ブルジョワ出身者は大学入学を禁止されたが、1918年時点ではブルジョワ家庭の出身でも大学入学は許可された。ランドは実に幸運だったと言ってよい。

ランドの父は、国を持たず社会的脅威にさらされやすかったユダヤ人らしく、報酬が確実に見込める理系や工学系職業に娘が就くことを望んだ。しかし、皮肉にも、3人の娘たちは、それぞれ文学や音楽やデザインに進んだ。

1921年から24年まで、ボルシェヴィキは、反ソ連の言論活動をする大学人を追放した。220名の哲学者や知識人が逮捕された。ランドの母校であった進歩的なブルジョワ・エリートのスツイニン学園も閉鎖された。政治的自由を含むあらゆる自由が抑圧された。1日1000カロリーの配給しかない食糧不足だった。しかし、それでも、ランドは、大学生らしくニーチェを愛読し、初恋したり、地元の作家クラブに入会したり、23年にソ連で解禁されたアメ

リカのハリウッド映画に夢中になった。

1924年10月にランドは大学を卒業した。その後は「国立映画芸術学校」に入学した。共産主義と資本主義の戦いにおいて、映画を国際プロパガンダの有力な武器と考えたボルシェヴィキは、この映画学校を1922年に創設していた。ランドは、アメリカに渡りシナリオライターになりたかった。母方の祖父の妹一家が、アメリカはシカゴに移住していた。その親類を頼り、半年間アメリカに滞在し、アメリカ映画について学び、ソ連に帰国後はプロパガンダ映画製作に貢献するという大義名分でパスポートを申請し、渡米後は、何とかアメリカに留まる。それが、ランドの母親とランドが考えていたことだった。母親は長女のランドの言動に危惧を感じていた。実際、ペテログラード大学から反ソ連的言動をしたという疑いで、ランドは退学になりかけたこともあったから。

当時、ランドと母親の間には確執があった。共産党支配の世間に適応する母を俗物とランドは考えていた。一方、失意のままに家庭に引きこもる父にランドは共感していた。しかし、実際のところは、ランドもランドの妹たちも父も、母の現実格闘能力の恩恵を大いに受けていた。「国立映画芸術学校」に入学できたのも、母親が共産党教員組合のメンバーだったからだ。

1925年に、「国立映画芸術学校」の学生であったランドが書いたポーランド生まれのサイレント映画のスター女優ポーラ・ネグリ (Pola Negri: 1897-1987) に関するエッセイが認められた。それは、有名俳優に関する小冊子のシリーズに加えられ、モスクワで出版された。ランドにとって書いたものが活字となって世に出たのは、これが最初だった。

1925年に、ランドのアメリカ行きのパスポートが交付される。長女のアメリカ渡航にあたって、母親は宝石を売った。母親は、渡米する娘のために英国人亡命者に英語の個人教授を依頼してくれた。1926年1月に、ランドはサンクトペテルブルクを立ち、ラトヴィアのリガでVISAを得て、鉄道で従妹が医学部で学んでいるベルリンに行った。そこからフランスに行き、フランス船でニューヨークに渡っ

た。母は、独りで長旅をする長女のために一等船室の切符を購入してくれていた。

### 2.3 ハリウッド時代

1926年2月19日に、ランドはニューヨークに到着した。4日間そこに滞在し、シカゴに鉄道で行った。列車の中で、ランドは、アメリカでの新しい自分の名前を創造した。アメリカ的でもないし、ロシア的でもないし、ユダヤ的でもなく、性別もよくわからない名前を選んだ。将来有名作家になるには、ユダヤの名前では不利だと考えたからである。アリス・ロウゼンバウムは、この時から、「アイン・ランド」になった。

この名前を選んだ理由については諸説ある。姓のランドの由来はいまだに不明である。名のアインの由来については、前述のランドの伝記作家のヘラーは以下のように推量している。ランドの父は、ヘブライ語で「眼」を意味するAyuinから、長女が幼い時に、長女をAynotchka (お眼目パッチリちゃん) と呼んでいた。だから、ランドは幸福だった少女期の思い出が詰まったAynという名前を新天地での再出発にあたり選んだのではないか (Heller, 2009, 261)。

ランドは、1926年2月から半年間、シカゴの親類宅に世話になる。親類が映画館を経営していたので、138本の映画を見ながら英語を学ぶ。8月に念願のハリウッドに行く。そこで、映画監督のセシル・B・デミル (Cecil B DeMille: 1881-1959) と知り合い、エキストラの仕事を得る。かつデミルの紹介で、家から遠く離れ映画産業で働く独身女性のために作られた寮Hollywood Studio Clubに入居する。さらに、これもまた、デミルの紹介で、パラマウント映画社で、フルタイムの下級映画台本作家 (junior screenwriter) に採用される。大監督と知り合い、映画会社で職を得たことを知らせるランドの手紙に、故郷のランドの家族は喜んだ。近いうちに一家もアメリカに渡るつもりで英会話の勉強を母や妹たちは始めた。しかし、まもなくソ連は、一般市民の海外渡航を禁じるようになってしまった。

ところで、筆者は、ランドが偶然に大監督のデミ

ルと知り合い、デミルがソ連からハリウッドにやって来た女の子に、たまたま親切に便宜を図ったとは考えていない。デミルには、ランドに便宜を図るだけの理由があったのではないか。これは筆者の推量であるが、ランドの父か、もしくは母方の祖父はフリーメイソン (Freemason) だったのではないか。フリーメイソンリー (Freemasonry) には、会員だけが知っている合図や合言葉がある。ランドは、それをデミルに示したのではないか。事実、デミルはフリーメイソンであった。デミルは、ランドが会員の子と知り、ランドにいろいろ便宜を図ったのではないか。また、デミルは、ランドと同じくユダヤ人であった。母親がドイツ系ユダヤ人であった。そのこともあり、デミルは、ユダヤ人のランドに映画界での機会を与えたのかもしれない。

ランドが弟子たちに思い出話として語ったデミルとの出会いの経緯には、これもまた様々なヴァージョンがあり、真実を話すのをランドが避けていた形跡がある。それは、フリーメイソンリーについて語ることを避けたかったからではないだろうか。当時から、この結社は、陰謀論的になり、うさん臭いものとして考えられていたのかもしれない。

ところで、1927年1月から始まった下級映画台本作家としての最初のランドの仕事は、制作予定映画の背景調査だった。5月からは、外部の作家が書いたものが映画化できるかどうかを評価する仕事に従事している。映画の原作本は、このような下読み担当者の審査を経過して、プロの映画台本作家によって映画用シナリオに書き換えられたのだ。

同年に、ランドは未来の夫になる人物に出会った。映画のエキストラをしていたときに撮影現場で、フランク・オコーナー (Frank O'Connor: 1897-1979) と出会った。5月にフランクと再会し、交際が始まった。フランクの兄たちとも交遊が始まった。

ところが、1928年に、ランドが下級映画台本作家として書いた6本のシナリオは、すべて映画会社に採用されなかった。彼女は、フルタイムの仕事を解雇されてしまった。その後は、ウエイトレスや、デパートの店員や、訪問販売員になって生活費を稼

いだ。ロシアの両親からの仕送りが必要であったほど、生活は苦しかった。それでもランドは、貧しいながら、いろいろ読書し勉強している。

1929年4月15日に、アイン・ランドはフランクと結婚した。1926年以来、VISAの延長を重ねてきたが、それも限界だった。フランクとの結婚のおかげで、ランドは、アメリカでの永住権を得た。7月には、友人のロシア系俳優の紹介で、RKO (Radio-Keith-Orpheum) の女性衣装部のフルタイムの事務職員として雇用された。3年勤務した後、女性衣装部の責任者 (manager) となった。生活が安定し、ロシアの両親に仕送りもできるようになった。

ランドはRKOで、『水源』構想のヒントとなる人物マーセラ・バナート (Marcella Bannert) という女性に出会う。彼女は、RKOの映画製作者ディヴィッド・O・セルズニック (David O. Selznick: 1902-65) のアシスタントだった。セルズニックは、映画版『風と共に去りぬ』 (*Gone with the Wind*, 1939) の製作者として後年、世界中に知られることになる。社会的上昇への野心に満ちたマーセラ・バナートは、長編小説『水源』のピーター・キーティング (Peter Keating) のモデルとなった。

この1929年は、アメリカにとっても世界にとっても、転機となった年である。10月にニューヨーク株式市場大暴落が起こり、大恐慌時代が始まったからだ。しかし、ランド自身は決して好んではいなかったRKOでのフルタイムの女性衣装部での職は、時代の嵐からランドとフランクを守ってくれた。

その間でも、シナリオライターや作家になるためにランドは書き続けていた。1934年10月から11月まで、ランドが書いた裁判劇『1月16日の夜』 (*The Night of January Sixteenth*) が、ハリウッド郊外の劇場で上演された。この劇は、『pentハウスの伝説』 (*Penthouse Legend*) とか『法廷の女』 (*Woman on Trial*) とか、何度もタイトルが変更されながら上演された。この劇が、ニューヨークのプロデュースで上演されることになったことを契機として、ランドはハリウッドからニューヨークに地盤を移すことに決め、RKOを退職した。

1934年12月にニューヨークに転居したが、自作

の『1月16日の夜』は、なかなか上演されなかった。古巣のRKOの東海岸支社での映画化用作品の下読みの仕事をフリーランスでしながら、生活費を稼いだ。

そうこうするうちに、1935年9月16日に『1月16日の夜』が上演された。なかなかの人気を得た。アメリカ国内だけでなく、ロンドンやスイス、ウィーン、ブダペスト、ベルリン、ポーランドなど、あちこちで上演された。当時としては珍しい法廷劇であり、判決は観客から選ばれた陪審員が決定するという趣向が多いに受けたし、法廷劇であるので製作費も安かったからだ。その上演料はランドの生活を支えた。しかし、ランドにとっては、この成功は満足できるものではなかった。この劇に描いたつもり彼女の思想については、観客や劇評家のほとんどが理解を示さなかったからである。

1936年には、ソ連時代の体験をもとに描いた小説の処女作『われら生きるもの』(We the Living)が、一流出版社のマクミランから出版された。経済的に余裕ができたので、家族をロシアから呼ぶためにランドは手を尽くした。しかし、ソ連は許可しなかった。前述のヘラーは、ソ連の体制批判である『われら生きるもの』を発表することは、故郷の家族たちを危険にさらすかもしれないとランドは考えなかったのだろうかという疑問を呈している(Heller, 2009, 97)。じょじょに、合衆国政府もソ連居住者との通信などに関して、市民に警告を発するようになり、以降、ランドと家族の文通が途絶える。

## 2.4 『水源』執筆

このような状況のもと、1935年12月から、ランドは、後に『水源』とタイトルを変えることになる長編小説『セコハン人生』(Second-Hand Lives)の制作ノートを作り始めた。ランドは、どの作品でも執筆を始める前に、執筆そのものにかかる時間よりも、構想に時間をかけた。

1936年夏から登場人物と出来事を構成し始めた。春までには、ほとんどのアウトラインができた。プロットとサブ・プロットができあがった。主人公は「建築家」と決めた。なぜならば、「それ

は、芸術と人間が生き残るための基本的必要性を満たす仕事分野だから。創造者としての人間のシンボルとして、建築家ほど雄弁なものは見つからないから」(It is a field of work that covers art and a basic need of men's survival. And because one cannot find a more eloquent symbol of man as creator than a man who is a builder)だった(Berliner, 2007, 58)。

しかし、当時のランドは、建築のことは全く知らなかった。ニューヨーク公立図書館から、建築の歴史や理論に関する資料を借りて読んだ。ルイス・サリヴァン(Louis Henry Sullivan: 1856-1924)や、フランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright: 1867-1959)について知った。建築家の仕事内容を観察するために、半年間、無給でエリー・ジャックス・カーン(Ely Jacques Kahn: 1884-1972)の設計事務所兼タイピスト兼ファイル係として勤務する。カーンは、ランドの意図を理解し、ランドの身元を周囲に明かさず雇ってくれた。建築家の会合やセミナーに連れて行ってくれた。

同時に、ランドは、『水源』制作に集中するための生活費獲得のために、より短い作品の執筆もした。1937年には、中編SF小説『讃歌』(Anthem)を書き上げる。1938年、『讃歌』のタイトルは『自我』(Ego)と変えられ、イギリスで出版された。『1月16日の夜』は、映画化されることになった。その映画化権利も、生活費獲得労働に従事せず執筆時間を確保するために貯金された。

1938年6月27日にクノッフ社(Knopf)と『水源』の出版契約する。しかし、1年後の約束の日までに、ランドは完成原稿を送ることができなかった。まだ手書きの下書き原稿(holograph)の段階だった。しかも全体の3分の1しか書いていなかった。クノッフ社は契約を1年延長してくれた。完成原稿提出締め切りは、1940年の6月28日となった。

一方、世界情勢は急変していた。9月1日ドイツがポーランドに侵攻し、9月3日に英国とフランスがドイツに宣戦布告した。第二次世界大戦が始まった。しかし、ヨーロッパはアメリカからは遠い。アメリカ市民の多くはアメリカの参戦には反対だった。



1940年6月、またもランドはクノップ社との約束を守れなかった。1940年から41年にかけて、ランド夫妻は、ローズヴェルト政権を阻止するために、共和党の大統領候補ウエンデル・ウイルキー (Wendel Willkie: 1892-1944) の選挙活動にヴォランティアで参加した。ランドは有能さを認められ、公に選挙応援演説をするようにまでなる。しかし、『水源』の完成は、さらに遅れてしまった。

1941年9月にドイツがソ連に侵攻した。ランドの故郷で家族が住むレニングラード (旧ペテログラード、旧サンクトペテルブルク) は、ドイツによって爆撃され、900日間に渡り封鎖された。レニングラード包囲戦である。ドイツは、キエフを占領し、34,000人のユダヤ人を虐殺した。ドイツは、ポーランドのあちこちに強制収容所を設置し、ユダヤ人を送り込んだ。レニングラードにいる家族のこと、ユダヤ人への迫害など、ユダヤ人のランドにとっては気がかりが多かった。しかし、もはや何よりも『水源』を完成させることだけに集中しなければならなかった。貯金も尽きかけ、経済的に逼迫していた。

ランドは、クノップ社との契約破棄以後、エージェントにも依頼し、いろいろ努力したが、ニューヨークに本社があるような大手有名出版社は、『水源』出版を引き受けなかった。12の出版社に断られた。やっと、インディアナポリスにあるボブズ＝メリル社 (Bobbs-Merrill Company) が引き受けられることになった。ボブズ＝メリル社の若い編集者が、彼女の未完原稿のコピーを読み、社長にかけあってくれた。これを出版しないのならば僕を解雇してくれと、熱心にかかけあってくれた。

ランドが正式に契約書に署名したのは1941年の12月10日だった。もし、契約の合意が一週間遅れていたなら、ボブズ＝メリル社は『水源』出版を控えるところだった。12月7日には、日本軍の真珠湾奇襲攻撃があり、アメリカは第二次世界大戦に参戦することになる。戦争が始まるとなれば、紙を含む物資の供給が制限され、長編小説を出版するための紙を入手するのが困難になる。しかし、ボブズ＝メリル社は、ちゃんと正式にアイン・ランドと契約し

た。完成原稿提出日は、1943年1月1日となった。契約の条件として、アイン・ランドは前金をボブズ＝メリル社に要求した。あと1年で原稿を完成させるためには、生活費獲得労働に時間を割くことができなかったからだ。前金を得てから、アイン・ランドは原稿を完成させる作業を急ピッチで進行させる (Heller, 2007, 144-45)。

ランドがA4用紙に2,300枚の手書きの原稿全部を書き終わったのは、1942年7月だった。そのあとは、手書き原稿の推敲作業が始まる。ランドは、ほとんど無駄なエピソードや登場人物を削った。小説の形式で伝えたい自身の哲学を表現するには余分であると思う部分を捨てた。この問題については、ショシャナ・ミルグラム (Shoshana Milgram) による、ランドの制作ノートと手書き原稿と最終的なタイプ原稿との丹念な比較研究「制作ノートから小説への『水源』」(“*The Fountainhead from Notebook to Novel*”) が、非常に情報豊かで有益である (Milgram, 2007, 4-38)。

『セコハン人生』 (*Second Hand Lives*) という最初のタイトルも変えた。作家が否定する生き方をタイトルにするのは愚かしい。『始動者』 (*The Prime Movers*) にする案もあった。しかし、moversには、「引越し業者」とか「発起人」とか「セックス狂」という意味もある。『推進力』 (*Mainspring*) という案も出たが、すでに同タイトルの本があった。タイトルが、『水源』 (*The Fountainhead*) に落ち着くまでもに紆余曲折があった (Berliner, 2007, 44)。

もう、いかにしても締め切りを遅らせるわけにはいかなかった。絶体絶命だった。ランドは、アンフェタミン (Amphetamin) とベンゼドリン (Bemzedrine) の処方医師に依頼する。これらは空軍兵士に処方されていた覚醒剤である。不眠不休の原稿完成作業が始まった。夫フランクの兄のニック (フリーの新聞記者) は、英語が母国語ではないランドの書いた英語の添削をしてくれた。アメリカ的表現に書き換え、特に会話を徹底的に直してくれた。夫のフランクは家事を担当し妻を支えた (Heller, 147-47)。年上の友人であり、かつラン

ドに保守主義や自由主義について教えた『機械の神』(*The God of Machine*, 1943)の著者であり、初期のリバータリアンであったイザベル・パタソン(Isabel Paterson: 1886-1961)もランドを助けてくれた。原稿の記述から、時事的事項を削除するようにランドに助言してくれた。ローズヴェルト政権とか大恐慌とかヒトラーとかスターリンとかファシズムとかナチズムとか、そのような類の事事的で具体的な個人名や事件名や国名が小説に記述されると、小説のテーマが持つ時代を超えた価値が損なわれると、パタソンは主張した。ランドは、パタソンの的確で貴重な助言に従った(Milgram, 2007, 11-12/Heller, 2009, 146)。

ドクター・ストップがかかるまでの覚醒剤に依存しての執筆作業の末、夫や義兄や友人の協力を得て、アイン・ランドは、やっと1942年12月31日大晦日に原稿を完成させた。原稿は、めでたくボブズ＝メリル社に送られた。

## 2.5 『水源』出版

1943年4月15日に『水源』は発表された。公式には5月10日だった。ボブズ＝メリル社は、初版7,500部を印刷した。1943年の秋までに初版7,500部は売れ尽くした。担当編集者はさらに5,000部の増刷を会社に提案した。しかし、ニューヨーク支社の販売担当者は、「この小説が10,000部も売れるはずない」と反対し、増刷数は2,500部でいいと言い張った。ところが、『水源』は、11月の感謝祭までに18,000部が売れた。1943年中に50,000部が売れた(Ralston, 2007, 73-74)。

ランドは、『水源』は爆発的に売れるような類のものではないと認識していた。質のいい読者に届かなければ意味がないと考えていた。アイン・ランドは、自分が書いた小説で世界を変えるつもりだったので、小説の思想を理解できない読者が読んでもしかたがないと思っていた。しかし、「質のいい読者」に届くには、少なくとも100,000部は売れないと意味がないと思っていた。アイン・ランドが目標とした販売数は、1945年までには実現した。1945年8月のニューヨーク・タイムズ(*New York*

*Times*)のベストセラーリストの第6位に『水源』は、躍り出た(Ralston, 2007, 73)。

比較的小さな出版社のボブズ＝メリル社は、十分な宣伝活動、広告活動をできないとランドは知っていたので、非社会的な彼女には珍しく、声をかけられたのならば、どんな集会にも出席して、自著の宣伝に努めた。「口コミ」(word-of-mouth)の力をランドは確信していたので、読者からの手紙には返事を書いた。極力書いた。届けられるファン・レターの量が膨大になってきたので、ランドは、ひとりひとりの読者に返事することを、ついに諦めた。

届けられるファン・レターの中で、ランドを特に喜ばせたのは、太平洋戦争に従軍している兵士たちからの手紙だった。ある兵士は空軍の飛行士だった。任務を終えた夜の休憩時間に、ろうそくの明かりを頼りに戦友たちと『水源』を輪読していると書いていた。また別の兵士は、『水源』に書かれているような理想の実現のために自分が戦っているのならば良かったのに、と書いていた(Ralston, 2007, 72)。

『水源』は、1967年までに452,500部売れた。

『水源』は、New American Library(Penguin社の一部門)が権利をボブズ＝メリル社から買って、ペーパーバックになった。ペーパーバック版『水源』は、1967年までに1,424,182部売れた。それから、大手出版社のマクミランも権利を得て、ハードカバー版を出し、1985年までに29,632部を売った(Ralston, 2007, 74)。2014年現在までに、日本や台湾や韓国や中国を含む各国語での翻訳も数えたら、何人が『水源』を読んだのだろう。少なくとも、この小説は、アメリカでは出版以来概算800万部は売れている。

ところで、出版当時の『水源』は、どんな評価を受けたのか。以下の記述は、マイケル・S・バーリナー(Michael S. Berliner)の『『水源』書評』(*The Fountainhead Reviews*)という論文に依拠している(Berliner, 2007, 77-85)。

20ほどの書評が出たが、もっともランドを喜ばせた書評は、1943年5月16日の『ニューヨーク・タイムズ・ブックレビュー』(*The New York Times*

*Book Review*) に掲載されたロリナ・プルエッテ (Lorine Pruette: 1896-1977) によるものだった。彼女は、心理学者兼社会学者として大学で教える先駆的フェミニストであった。彼女は、『水源』の書評「悪との闘争」("Battle against Evil")において、「私が思い出せる限り、アメリカ人女性によって書かれた唯一の思想小説 (the only novel of ideas)」と書いた。登場人物についても、「素晴らしく明晰 (literate)」で、「善と悪の表象としてロマン化されている」と評した。とりわけ、主人公を迫害する確信犯的偽善者のオピニオン・リーダーのエルスワース・トゥーイーの造形については、「現代的悪魔の見事な擬人化」であり「最高にして最悪な全体主義的精神」であり「人格の高潔さを破壊するために利他主義を利用する」と的確に把握した (Berliner, 2007, 77-78)。ロリナ・プルエッテに礼状を書いたほど、ランドは、彼女の書評に感銘を受けた。

エッセイストで文芸批評家、ジャーナリストでもあったベンジャミン・デ・カセラス (Benjamin De Casseras: 1873-1945) による雑誌『ニューヨーク・ジャーナル・アメリカンズ』(*New York Journal Americans*) での5月16日号のコラムでの評価も、ランドを喜ばせた。彼は、「『水源』とは自分自身のことだ。すべての行動と思想の発電機だ」と書いた。「ロークは試金石である。読者の反応が、その読者の性質を測定することになる」とも書いた。

ベット・アンダソン (Bett Anderson) は、『ピッツバーグ・プレス』(*the Pittsburg Press*) の5月30日号において、「この小説の衝撃は大きく、読者は作者の哲学と、それらの迫真性に揺さぶられざるをえない。読了後、ハワード・ロークという建築家を知ることは恩恵 (privilege) であると思う感覚が長く残る」と書いた。

もちろん悪評もあった。ダイアナ・トリリング (Diana Trilling: 1905-96) は、『ネイション』(*Nation*) 誌の書評コーナーにおいて、「この小説に騙されるような類の人々は、紙の配給に関する厳しい講義を聴くべきだ」と書いた。紙が不足する戦時中に、くだらない長編小説が出版されるのは紙の

浪費であると、トリリングはあてこすったのだ。左翼系ニューヨーク知識人のひとりとして活躍した高名な文芸批評家であり、かつコロンビア大学英文科教授のライオネル・トリリング (Lionel Trilling: 1905-75) の妻であったダイアナ・トリリングの『水源』書評が好意的なものではあるはずはなかったが。

同じ『ニューヨーク・タイムズ』(*New York Times*) 系の書評でも、日曜版の『ニューヨーク・タイムズ・ブックレビュー』では賞賛されたのだが、5月12日の通常版の書評において、オーヴィル・プレスコット (Orville Prescott: 1907-96) は、『水源』の思想内容を、これ見よがしに無視した。「非常に集中した知的情熱が輝いてはいるが、建築に関する鯨みたいな本だ」と揶揄した。彼は、24年間も『ニューヨーク・タイムズ』の書評者を務め、前述のナボコフの『ロリータ』について、「退屈、退屈、退屈 (dull, dull, dull)」と書いた人物であり、その辛辣さには定評があった。

6月13日号の『ブック・レビュー』(*Book Review*) 誌において、オーガスト・ダーレス (August Derleth) は、ランドの文体について、「不快でいらさせざるほどダラダラしている」(offensively pedestrian) と評し、「小説を書く前に、この著者には学ぶべきことがいっぱいある」と断じた。

このように『水源』の出版直後の書評には酷評もあったが、的確に作品を理解し共感する書評者も少くはなかった。

### 3 『水源』の内容

『水源』は、1922年から1940年までの18年間にわたる、ある天才的建築家の苦闘を経ての単なる成功物語ではない。ロークの建築観は彼の世界観、人間観、人生観と結びついている。それらは、彼の生きる時代の価値観ばかりでなく伝統的価値観とも対立する。この小説は、ロークの思想闘争でもある。小説は、彼と3人の男と1人の女との関わりを通して描かれる。

### 3.1 ハワード・ローク

ハワード・ローク (Howard Roark) は、10歳のときに建築家になることに決めた。その理由は、彼が神を信じていないからだ。神のいない地上を美しくするのは人間だ。人間に責任がある。地上の事物を美しくするのは建築だ。ロークは、地球を愛しているから、地上を美しくしたいから、建築家になることに決めた。

しかし、彼は、建築工事現場の作業員をしながら苦学しながら通っていたスタントン工科大学 (マサチューセッツ工科大学がモデル) を退学になる。大学で教えらるる建築学に異をとらえたことから教授陣の怒りを買った。ローマ時代やルネサンス時代の古典様式を現代風にするだけの建築学に彼は満足できない。その建築物の機能を最大限に活かすデザインと建築法と素材を、妥協なく彼は求める。彼のデザインと見解は、教授陣には伝統的な建築を否定する傲慢さに見える。

ロークは私淑していた高層建築家であり、今は落ちぶれているヘンリー・キャメロンのニューヨークにある設計事務所に就職する。ロークにとってキャメロンは真に才能あるプロなのだが、時代はキャメロンについていけない。同様に、キャメロンを理解できるロークの仕事も理解されない。幾多の困難や迫害が彼を襲う。しかし、どんなに打撃を受けても、彼の心の奥の神聖な場所にまで、傷は及ばない。ロークは、数は少ないが素晴らしい友を得る。敵は多い。しかし、ロークは彼らを敵とは考えない。彼は、自分自身が、自分自身の人生の充実のために建築を通じて何かをこの地上に生産することのみ関心がある。彼は、たゆまず研鑽を続ける。

### 3.2 ピーター・キーティング

ピーター・キーティング (Peter Keating) は、いわば「好青年」である。「いい人」である。彼は、家族や教師や世間が彼に期待する生き方、他人の生き方 (セカンド・ハンドの生き方) に従属する。スタントン工科大学を総代で卒業し、ニューヨークの一流大手設計事務所に就職し、上役や顧客の意を汲

んで仕事をするので評判はいい。彼には建築に対する彼なりの原則もなければ理想もない。本当は画家になりたかったが母親の希望通り建築家になった。世間から認められ出世するためには嘘もつけば裏切りもしながら、ライバルを排除する。愛するキャサリンとの婚約を破棄し、自分が勤務する設計事務所社長の娘ドミニクと結婚し、世間的な成功を達成する。

彼は、設計のことで困った時はロークにこっそり相談する。ロークは、建築のデザインをいとも無造作にできる。そのアイデアを、学生時代からキーティングに平気で提供してきた天才である。ロークに設計してもらった案が大きな建築賞を取りキーティングが名誉や富を得ても、ロークは関心がない。ロークは彼の思い通りの仕事ができればいい。他人との比較や競争には関心がない。そのロークの徹底した自立した姿に、キーティングは圧倒される。若い名建築家として成功している自分がひた隠しにしている無能さや卑劣さをロークだけは知っている。しかし、ロークはそれを暴露する気もない。なぜならば、ロークはキーティングを嫌うほどにもキーティングに関心がないからだ。それを知っているキーティングは、ロークを憎む。彼は、世間の大勢に流される大多数の人間の代表である。世間的には成功者でも、彼の人生は空虚である。

### 3.3 エルスワース・トゥーイー

エルスワース・トゥーイー (Ellsworth Toohey) は建築史の研究家であり、かつ指導的知識人である。大新聞にコラムを持つオピニオン・リーダーである。トゥーイーは資本主義的な自由競争社会を否定する。競争や闘争のない平和な利他的共同社会、福祉社会を提唱する社会改革家である。トゥーイーは、人間が自己をなくし他人のために生きることが理想の生き方であり、利他的生き方がもっと徹底されれば社会悪も消えると唱える。

実は、その高邁な弱者救済や社会福祉の完全実現を唱える思想は、トゥーイーの人間愛から生まれたものではなく、支配欲や権力欲から来ていた。トゥーイーには、自分の内面から湧き上ってくるような

欲望はない。自分の内面の空虚さを、トゥーイーは知っている。他人が彼を必要とし、彼に依存することによって、彼は生きる意味が見出せる。トゥーイーは、子どもの頃から自己完結した確固とした自己を持つ人間を憎んできた。彼らは、トゥーイーの内なる依存性をあぶりだすからだ。

ところで、トゥーイーのような人間が支配欲を満足させることができる社会は、どのような社会か？それは、世間や他人との協調のために自己否定し、自分を見失う人間ばかりの社会である。集団主義的全体主義的社会は、管理と支配がしやすい。トゥーイーは、その徹底した確信犯的偽善を駆使して、人々の「善意」に訴え、集団主義的社会の実現こそが進歩であり大義であると提唱する。トゥーイーの行動や提唱は、伝統的な宗教や道徳からも支持される。人々には彼の、いかにも高潔そうな知識人の仮面に隠された人間蔑視と野心を見抜けない。

トゥーイーは、ロークを一目見たときから、ロークの社会的抹殺を決心する。突出した才能の人間は、悪平等主義の協調的共同社会では邪魔なので、排除されなければならない。トゥーイーは、ロークの才能や高潔さが理解できる。彼のような傑出した人間が才能を伸ばせるような自由な社会であればこそ、社会は進化し繁栄することもわかっている。しかし、トゥーイーにとっては、社会が進歩しなくても活力が消えて停滞しても構わない。大多数の愚民で成立するのが社会なのだから、社会は愚民に優しくあるべきだ。進歩には厳しい競争や変化がつきものだ。進歩や変化は敗者を作る。格差を作る。ロークのような人間を排除することは、安定した平等な社会構築には必要である。トゥーイーの執拗で陰湿なローク迫害には、彼なりの「大義名分」がある。

### 3.4 ゲイル・ワイナンド

ゲイル・ワイナンド (Gail Wynand) は、ニューヨークのスラム街ヘルズキッチンで浮浪児の境遇から独力独学でアメリカ第一の新聞王となった。ワイナンドは自分の厳しい人生から、社会の無情さや俗悪さを知悉している。ワイナンドは、人間の高潔さというものなど信じていない。高潔な人間を見る

と、そういう人々を法外な報酬で雇い墮落させてきた。ワイナンドは、人間世界全体を冷笑している。人間存在にいっさい期待をしていないからこそ、彼が社主を務める『パナール新聞』は愚劣な社会に媚びる内容ばかりを掲載し、大いに売れ、ワイナンドに富をもたらしてきた。ワイナンドは自分の心の奥底に在る高潔さを自覚している。そのような自分が、軽蔑すべき人間社会で生きることの空虚を認識している。しかし、事業拡大によって累積される仕事を処理する多忙さの中で、その空虚な思いと孤独感は抑圧されている。

そのようなワイナンドがロークと出会う。ロークの何ものにも屈しない強さや自立が、彼には理解できる。自分と似ているからである。人生で初めて出会った尊敬できる人間だと思う。ワイナンドはロークの親友となる。さらに庇護者になろうとする。新聞にローク支持や賛美の記事を掲載させ、ロークの才能を認めさせようとする。ロークには庇護者も味方も必要ないのに、世間が自分の才能を認めなくても自分自身が納得できれば、ロークはそれでいいのに。

ワイナンドは、トゥーイーの策略にかかり、新聞不買運動や組合のストライキにより追いつめられ、ローク支持を諦める。貧困から身を起し、半生かけて作ってきた巨大新聞社ネットワークを手放すことがワイナンドにはできなかった。しかし、生まれながらの精神の王者であるはずの自分が、トゥーイーやトゥーイーの手先となる人々に譲歩してしまったことは、ワイナンドの誇りを打ち砕いた。「セコハン人間」になるために生まれた人間ではないのに、彼らに敗北し、ロークを裏切った自分の本質的な弱さにワイナンドは深い衝撃を受けた。

ワイナンドは自分の大新聞社を閉じた。自分が生まれ育ったスラム街の再開発を賭けた自社ビルの設計と建築をロークに託す。それが彼の贖罪だった。

### 3.5 ドミニク・フランコン

ドミニク・フランコン (Dominique Francon) は、キーティングの就職した一流設計事務所経営者ガイ・フランコンの娘である。美しく頭脳明晰でワ

イナンドの傘下にある新聞社の記者をしている。ドミニクは、自分の父親の所有する採石場で働いていた労働者の美しさ、たくましさに動揺した。その青年は、臆するところもなければ自己を誇示するところもない。ドミニクは、子どもの頃から、世間や人々の俗物性や愚劣さを深く嫌悪してきた。真善美など現実の社会では破滅させられるのが必至であると絶望してきた。だから、ドミニクは、何ものにも誰にも関心を持たず執着しないことを自分に課してきた。それが、この世で自由に生きるということだと考えてきた。なのに、彼女はその青年には強い欲望を感じた。その青年こそ、設計事務所を転々としては解雇され、採石場労働者となっていたハワード・ロークだった。二人は強くひかれあい、ロークによる彼女の陵辱という形で二人は結ばれた。

その後、ドミニクは自分を感動させた現代的美に満ちたビル設計者が、自分を陵辱した青年だと知る。完全な独立と自由を保持したい彼女は、自分がロークに心奪われ支配されるのが許せない。美しいものはこの世の腐敗に汚される前に滅ぼすべきだ。だから、ドミニクは彼女が担当する新聞のコラムでロークの建築を批判し続ける。ドミニクとロークは、搾取や相互依存を愛と呼ぶ通俗な恋愛観や自己欺瞞とは縁がない。ドミニクはロークを愛しているがために、自分が軽蔑するキーティングと結婚する。それは、ロークの社会との闘争を彼女が共有するために、彼女が自分に課す試練だった。ロークもそれを受容する。ドミニクはその後、キーティングと離婚し、ワイナンドと結婚する。それもドミニクにとっては、ロークの闘争を共有するために自分に課した試練だった。

### 3.6 クライマックス

この小説のクライマックスは、政府による大規模な公共住宅（プロジェクト）建設現場をロークが爆破し、裁判にかけられる事件である。そのプロジェクトはキーティングの設計事務所が請け負った。しかし、実際にそれを設計したのはロークだった。ロークはその設計図を、全てロークの案どおりに建築するという条件でキーティングに渡した。自分の実

験的で斬新な設計案が現実に活かされることがロークの望みだった。しかし、プロジェクトは、役人の集団主義によってロークの原案から、ひどく後退してしまった。だからロークは建設途中の集合住宅を爆破した。

裁判において、ロークは弁護人もつけず、プロジェクトを破壊した理由を語る。ロークは前もって陪審員として、安易な同情や感傷で動揺する「いい人」「優しい人」ではなく、最も厳しい手強い人々を選んだ。優れた個人の才能から出たプロジェクトのデザインを集団主義的妥協のために劣化させることが、どれほど社会を停滞させるか、ロークは冷静に語った。社会を進歩させ人類に貢献してきたのは個人の創造性であり、集団的脳というものなどは存在しないと語った。陪審員団はロークの弁明を理解し、彼を無罪と判断した。

小説の最後は実に象徴的だ。ワイナンドの自社ビル高層建築の責任者として建設中のビルの頂上に作られた足場に立つロークに会うために、建築資材用の簡易エレベーターに乗ってドミニクが上昇していくというシーンだ。『水源』の始まりの言葉はHoward Roarkだが、終わりの言葉もHoward Roarkである。

## 4 主要登場人物の造形に関する注意点

### 4.1 フランク・ロイド・ライトはロークのモデルか？

このハワード・ローク像は、前述の高名な建築家のフランク・ロイド・ライトをモデルとしているとよく言われてきた。これには異論もある。実際のところは、ロークはライトに似たところもあるが、全く似ていないところもあり、ライトのことについては、ランドは多少は参考にしたが、それだけのことだったというのが事実のようだ（Berliner, 2007, 41-64）。

前述のヘラーは、ハワード・ロークの原型は、ピョートル大帝（Peter, the Great : 1682-1725）だと推論している（Heller, 2009, 22）。ピョートル大帝は、北の遅れた帝国であったロシアを西洋列強と

拮抗できる国とするために、沼地に壮麗な帝都サンクトペテルブルクを建設させた。そのためにロシア各地から50,000人以上の農奴を徴用し、建設工事現場で使役した独裁者だった。ピョートル大帝は、若き日にヨーロッパで出自を秘して大工の徒弟となり、建築に必要な技術を習得し、自ら設計図を書いた皇帝だった。単に君臨しているだけの立場に収まらず、生産的な仕事を自らに課した異色の皇帝だった。ヨーロッパ中の都のエッセンスを全部持ち込んだかのような「花の都テーマパーク」のような美しい北の古都サンクトペテルブルクは、ピョートル大帝という建築家でもあった人物なくしては、この地上に実現しなかった。

確かに、ハワード・ロークの造形は、単なる天才建築家にはおさまらない。たとえば、ロークを評してロークの友人の彫刻家スティーヴン・マロリー (Stephen Maroly) が、ロークについてこう語る。

"I often think that he's the only one of us who's achieved immortality. I don't mean in the sense of fame and I don't mean that he won't die some day. But he's living it. I think he is what the conception really means. You know how people long to be eternal. But they die with every day that passes. When you meet them, they're not what you met last. In any given hour, they kill some part of themselves. They change, they deny, they contradict---and they call it growth. At the end there's nothing left, nothing unreserved or unbetraysed; as if there had never been an entity, only a succession of adjectives fading in and out on an unformed mass. How do they expect a permanence which they have never held for a single moment? But Howard---one can imagine him existing forever." (Rand, 1993, 452)

「俺、よく思うんだ。永遠というか不滅ってものに到着したのは、あの人だけじゃないかって。名前が残るっていう意味じゃない。あの人死なないって意味じゃないよ。でも、あの人

は不滅ってものを生きている。不滅という概念がほんとうに意味するものなんだ、あの方は。俺はそう思う。世間の連中は永遠でいたいと憧れるよね。だけど、そういう連中は刻々と過ぎる毎日ごとに死ぬ。そういう連中に会ったときとは違っている。それぞれに与えられた時間の中で、連中は自分たちの一部を殺していくんだ。彼らは変節する。彼らは否定する。彼らは矛盾する…連中は、それを成長と呼ぶ。最後になると、残っているものが何もなくなる。変節されず、裏切られていないものは何もなくなっている。まるで、もともとひとつの実在なんかなかったみたいに。形のない塊にくっついて出たりひっこんだりする形容詞の連なりでしかないみたいに。ほんの一瞬たりとも、連中が持ったことのない変わらなさ、不滅ってものを連中が持てると期待するほうが、おかしいんだ。でも、ハワードは・・・あの方は、永遠に存在しているって、俺には想像できる」

このように、ロークは、「永遠」 (immortality) と比喩されるような、太陽や北極星のように動じない人間として造形されている。確かに、ロークの造形は、神話的人物のような、歴史的人物のような時空を超えた大きさや深みを付与されている。ハワード・ロークの原型はピョートル大帝であるというヘラーの指摘を、筆者は強く支持する。

ただし、ロークの恩師であるヘンリー・キャメロンは、明らかにライトの師であったルイス・サリヴァンをモデルにしている。サリヴァンは、「高層建築の父」「モダニズムの父」と呼ばれる天才的建築家であった。しかし、シカゴ博覧会以来、アメリカの建築の流行が古典様式に戻ったので、サリヴァンは、仕事に恵まれず、アルコール中毒となり失意のまま亡くなった。サリヴァンが唱えた「形態は機能に従う」 (Form ever follows function) という言葉は、ロークがスタンントン工科大学の学部長に語るローク自身の建築観の原理ともなっている。

#### 4.2 キーティングこそ『水源』構想のヒント

前述のように、『水源』は、このキーティングのモデルとなった「女性」にランドが出会ったことから構想された。ハワード・ロークという主人公を夢見たから、構想されたのではなかった。

ランドが、映画会社RKOの衣装部で働いていたオフィスの隣室は、映画製作者セルズニックのアシスタントの女性のオフィスだった。ランドは、彼女の、典型的な「アメリカ的やり手」(American go-getter)らしい上昇志向や処世術の駆使に圧倒され興味を抱いた。そして、彼女に「あなたが人生で達成したいものは何か？」と質問してみた。すると、彼女は、「私は、隣の人が自動車を1台買ったら、2台欲しい。誰も自動車が欲しくないならば、私は自動車を欲しくない」と答えたという (Heller, 2007, 108-110)。

ランドは、彼女との会話によって啓示を受けた。彼女は一般的には利己主義に見えるが、実は自分というものがない。彼女は、他人の欲望を自分の欲望にしている。彼女自身の内面から彼女が求めるものはない。他人に関係なく自分がしたいことはない。すべて他人との比較によって自分が決まる。他人の目に映る自分だけが自分であり、自分自身そのものは空虚である。

ランドは、彼女のような人間を、他人がすでに生きた人生を、すなわち「中古の人生」をなぞるだけの「セコンド・ハンド人間」だと思った。これが、『水源』(*The Fountainhead*)が最初は『セコハン人生』(*Second-Hand Lives*)というタイトルで書き始められた理由であった。

#### 4.3 ハロルド・ラスキがモデルのトゥーイー

ランドは、このエルスワース・トゥーイー造形にあたっては、4人の同時代人を参考にしている。彼らは、リベラル系知識人が共産主義や社会主義の提唱者であった。ひとり、優雅な理論家で科学技術の発展に冷たい目を向け、共同で使用する建築を礼賛したルイス・マンフォード (Lewis Mumford) だった。ひとり、ヘイウッド・ブラウン (Heywood Brown) であった。彼は共産党新聞ギルドの前身を

創設し、負け犬を礼賛する有名なコラムニストであった。3人目は、雑誌『ニュー Yorker』(*the New Yorker*)の書評担当のリベラル知識人であり、ラジオの人気番組のホストを務めたクリフトン・ファディマン (Clifton Fadiman: 1904-99) だった。最後のひとりが大物だ。英国の社会主義者ハロルド・ラスキ (Harold Laski: 1893-1950) だった (Heller, 2009, 116)。

ところで、ファディマンは、酷評を受けた『肩をすくめるアトラス』に対して、珍しく好意的書評を書いた人物である (Berliner, 2009, 133-37)。『水源』における最大の悪役のモデルのひとりとしたファディマンからランドが援護射撃してもらったということは、皮肉なことだった。

なで肩の痩せた貧相な体つきで、顔は卵型であり、髪型は黒髪を真ん中で分け撫でつけていて、眼鏡をかけ、鼻の下に口髭を蓄えているというエルスワース・トゥーイーの容貌は、ハロルド・ラスキから借りている。

ハロルド・ラスキは、マンチェスターの裕福なポーランド系ユダヤ人の貿易商の家に生まれ、16歳でオックスフォード大学に入学した秀才である。1920年代以降は、英国における左翼アカデミズムの牙城ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) やハーヴァード大学で教鞭をとった。ラスキは労働党員であり、ソ連も訪れている。英国の1930年代は「ラスキの時代」だと言われたほどに、欧米知識人のマルクス主義接近を牽引した人物である (水谷, 1994, i)。ラスキは、ローズヴェルト大統領夫人のエレノア・ローズヴェルト (Anna Eleanor Roosevelt: 1884-1962) とも親交があったので、社会主義的政策を特徴としたローズヴェルト政権にも影響力があったと考えられる。政府の官僚と結託するエルスワース・トゥーイーの造形については、ランドは、このハロルド・ラスキから多くのヒントを得た。

#### 4.4 ニーチェ的超人は奴隷の奴隷

1949年に上映された映画版『水源』のシナリオはアイン・ランド自身が書いたものであるが、映画



においては、ワイナンドは自殺する。小説では暗示されているに過ぎないが、ロークに自社ビル設計を託した後にワイナンドはピストル自殺をする。王者にふさわしい資質に恵まれたワイナンドが、悲劇的人物として造形されているのは、なぜなのか。このワイナンド像に関しては、ランド思想におけるドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche: 1844-1900) の影響について述べなければならない。

アイン・ランドが、大学生時代以来、ニーチェの哲学から学んだことは多い。ニーチェの利他主義の否定と、イマヌエル・カント (Immanuel Kant: 1724-1804) の純粹理性批判の否定と、宗教や超自然的なものの否定と、人間の人生の目的は、その人間の人生そのものであると考えることは、ランドの思想の骨格である。ニーチェは、「理性」のなかに、演繹的推論 (deductive reasoning) も能力も直観も想像力も認識も感覚も含めた。ランドは、情緒や感情 (emotion) を理性の一形式とするニーチェの考えは受け入れなかったが、ニーチェの理性概念の背後にある基本的な考え方には共感した。すべての本能は、基本的には理性であり、理性とは意識された本能だと理解した。そのことから、身体と精神の二元論 (mind-body dichotomy) をランドは退けた。

また、ニーチェの「超人」思想にもランドは影響を受けた。ニーチェの超人思想とは、以下のようなものである。ニーチェが語るところの超人は、自分自身の人生が生きる目的であるのだから、絶えず自分を最大限に活用する。自分の才能や勇気や創造的意志を絶えず向上させることを義務とする。ニーチェが語るところの超人は、外部の権威を認めず、自分自身を自分の法とする。そのような超人は世間的な善悪の彼岸に立つ。しかし、ふたりの人間の理性が相克する場合はどうなるか。その解決法は、力 (force) を行使し、自分の意見に同意しない人々に強制することによってでしか、超人は自分の見解の正しさを確立することができない。これが、社会に「階層」というものが生まれる由来だ。超人は権力への意志 (will for power) を持ち、支配者とな

る。そうでないものは大衆として超人の支配を受け

る。このようなニーチェの超人思想の根本には、社会進化論的発想や優生思想がある。人類の福祉の実現のためには、社会が進歩し繁栄しなければならない。社会が進歩し繁栄するには、社会の構成員それぞれが、道徳的にも能力的にも優秀でなければならない。だから劣等な人間や民族は排除されねばならない。したがって、優生思想は、ドイツナチスのユダヤ人虐殺や知的障害者や子孫を生産しない同性愛者迫害の正当化に使われた。アメリカの南部においては、黒人差別や黒人奴隷制度維持の正当化に使われた。この観点から、ニーチェの超人思想も、ナチスに加担したと批判されてきている。

ただし、ニーチェは、適者生存 (survival of the fittest) とか自然淘汰 (natural selection) の発想は採らなかった。社会の進化は、超人であろうとする個人の絶え間ない自己啓発によって、より高度な存在になろうとする努力によって、実現するのだとニーチェは考えた (Merrill, 1993, 22-27)。

『水源』においては、ゲイル・ワイナンドが、衆愚の高みに立ち、権力を追求するニーチェ的超人を体現している。しかし、では、なぜアイン・ランドは、ワイナンドを最終的に敗北者に設定したのか。

ワイナンドは、生涯を権力の追求に捧げてきた。権力を得るために、大衆の低俗な趣味にあわせた新聞を発行し、影響力を増大させてきた。

つまりは、ワイナンドは、大衆を支配し操作しているつもりで、実際のところは、大衆から支配され操作されてきたのだ。ワイナンドは、小説の終盤で、自分が軽蔑する大衆の奴隷であったことに気がつく。権力というものは、権力によって支配され操作される他人を必要とするのだから、必然的に権力は依存的なものになる。奴隷の主人は、奴隷の奴隷である。

ランドは、自分に影響を与えてきたニーチェの超人思想の限界を、ワイナンドの造形を通じて認識した。だから、ワイナンドに悲劇的最後を与えた。そうすることで、ランドは、ニーチェの超人思想を破棄した (Merrill, 1993, 47-50)。

実のところ、『水源』の制作ノートや手書き原稿段階では、主人公のハワード・ロークの造形にも、ワイナンドの造形と同じく、ニーチェの超人思想の影響があった。しかし、ランドは、最終的にはハワード・ロークの造形に残っていたニーチェ的なものを削除した (Milgram, 2007, 13-22)。執筆過程で、超人思想の内なる弱さと依存性をランドが認識したからである。だから、権力への意志を持たず、自分が属する世界がいかにか墮落していようと、人々が愚劣であろうと、それに左右されることのないハワード・ロークという人間像を、ランドは創造した。ワイナンドが超人の末路として造形されたのは、ロークの「権力への意志を持たない超人」像を浮き上がらせるためでもあった。似て非なるものを並べるとは、差異を際立たせるにはいい方法である。

#### 4.6 ドミニクこそ真の主人公

『水源』は、19世紀的な教養小説 (Bildungsroman) ではない。主人公の人間形成と成熟の過程を描いた小説ではない。ハワード・ロークは、最初から完成された人格として物語に登場する。彼は変化しない。彼は物語に登場する人々の「試金石」だ。彼への反応によって、それぞれの登場人物の道徳性が測定できる。

ロークと出会うことで、もっとも劇的な変化をするのは、ドミニクとワイナンドである。特に、ドミニクは、小説の進行につれて人格的に成長する。ついには、世界への恐怖から解放される。ロークを真に理解し受容する勇気を得る。もし、小説というものが、主人公が幾多の体験を重ねて大いなる認識にいたるといふ成長物語であるのなら、この小説の真の主人公は、ドミニクである (Merrill, 1993, 46)。

ドミニクというヒロイン像のフェミニズム的意義については、本論5.4において詳述する。

## 5 『水源』の注目すべき相

### 5.1 アメリカの国民文学

アイン・ランドが、『水源』を構想し書いていたのは、主に「赤い十年」(The Red Decade)の1930年代だった。資本主義経済への幻滅から労働運動が全米を席卷し、社会主義が現状打破の思想として期待され、ソ連に熱い目が注がれた時代であった。時のローズヴェルト政権は、失業対策のために資本主義の原則からはずれたニューディール政策を採用し、敵対勢力からその政策の違憲性を問われたほどに、時代の空気は社会主義礼讃が濃厚だった。スターリンによる反スターリン派大弾圧 (逮捕者250万人、処刑68万人、獄死16万人の粛清であった)を経験することはなかったにせよ、ソ連の現実を知っていたランドにとっては、アメリカの30年代は苛立たしい時期だった。その「赤い時代」に書かれた『水源』は、ローズヴェルト政権への風刺文学でもあった。

たとえば、『水源』には、ローズヴェルト大統領が設置させた「市民芸術部局」(Civil Works Administration: CWA)をパロディにした団体が登場する。この団体は、画家や音楽家、舞踊家、俳優、作家などの、本来ならば創造者として、何ものにも依拠しない独立独歩な存在を志向するはずの芸術家を政府が集めて救済する機関である。政府の支援とは、容易に「検閲」に転化する。それを受け入れられるような芸術家は芸術家ではありえないのだが。

『水源』には、ローズヴェルト政権お得意の公共事業を嘲笑するようなエピソードも描かれている。キーティングのかわりに密かにロークが設計した斬新で経済的な公営集合住宅コートラント・ホームズ案を、役人や役人と結託した建築家たちが劣化させることによって、税金が浪費されるエピソードである。この小説が、ニューディール時代への風刺でもあることは明白である (Szalay, 2000, 78-87)。

しかし、『水源』が大いに読まれるようになったのは1949年の映画化以降の冷戦期だった。この小説が、自由市場競争の資本主義国アメリカと計画統制経済の社会主義国ソ連の対立が、人間の魂という

領域に変換された物語として受容されたことは確かである。作家のランドは、革命混乱期のソ連から亡命してきたのであるから、ソ連体制の批判者としての資格は十分にあった。

また主人公のハワード・ロークをはじめとして、この小説で肯定的に描かれる登場人物は、アメリカ開拓時代以来の草の根のアメリカ人が好む独立独歩の男たちである。ロークは銃を持てば西部劇のヒーローになりそうである。機関銃を持てば恐れを知らない連合軍兵士になりそうだ。彼が摩天楼の建築家という設定も、摩天楼という建築様式が、アメリカでもっとも早く発展したのであるから、実にアメリカ的である。

つまり、『水源』は、冷戦期のアメリカ人の国家幻想を強く支えたに違いない。同時に、アメリカ人が歴史的に構築してきた肯定的セルフ・イメージ保持にも甘美に働きかけたにちがいない。

いわば、この意味で、アイン・ランドは、「アメリカ版司馬遼太郎」である。司馬は、『竜馬がゆく』や『坂の上の雲』など幕末の志士たちや明治の政治家や軍人の伝記小説を通して、近代国家成立を可能にした「優秀な日本人」神話生成に寄与した。その神話は、高度成長期の日本の「アメリカに追いつけ、追い越せ」という国民的/国家的欲望をかきたてた。西洋列強にひるまず近代日本を作り上げた「優秀な日本人の末裔」なのだから、それはできると暗に鼓舞した。

ほんとうのところは、幕末の日本は、英国やフランスやドイツが（売れ残りの）武器を売りつける市場でしかなかった。日本国内で内乱をしているつもりが、それは、フランスとイギリスの帝国主義的な経済戦争の代理戦だった。また、明治政府が採った政策の多くは、西洋列強の政府の思惑によって左右された。社会インフラを整備して近代化に邁進する日本は、ヨーロッパ金融資本家にとっていい投資先でもあった。幕末から明治にかけての近代化には、すべて「お雇い外国人」が関与していた。日本人が独力で近代化を成し遂げたわけではないのだ（副島，2014）。しかし、司馬遼太郎の作品は、そういう自国の歴史の真実を直視できない段階にいた昭和

期の読者には、必要なものだったのかもしれない。

『水源』の話に戻る。この小説は、いかにソ連の進出が目を見張るものであろうと、アメリカのシステムが正しいのだと冷戦期の読者を鼓舞した。ロークのような高潔な人間を排除するようなソ連的集団主義システムには大義も勝利もないと主張した。

『水源』に提示されているのは、単なる個人主義と集団主義の相克ではない。個人主義の集団主義に対する「道徳的優位」である。この意味で、『水源』は、アメリカを善とし、ソ連を悪と断じる冷戦期の「アメリカの国民文学」である。

ところで、『水源』は、明らかにアメリカの伝統的小説の型である「ロマンス」を踏襲している。世界を善と悪の闘争として見るマニ教的世界観が入り込むので、アメリカの小説が写実主義というよりは寓話的相を持つことは、1950年代から、すでに批評的前提である（Chase, 1957, vii-xii, 12-13）。ピューリタンのロマンスならば、神と悪魔の闘争の場として描かれる世界は、『水源』においては、個人主義と集団主義の対立、（ランドが意味するところの）利己主義と（ランドが意味するところの）利他主義の戦いの場として提示されている。その意味で、『水源』は、「冷戦ロマンス」とも呼べる。

同時に、『水源』は、アメリカ的価値である自由と個人の尊厳を侵犯するアメリカの中の「内なるソ連」について警告を発している（藤森，2001，114-18）。アメリカ人が自国の建国の精神を忘却しがちであることを警告している。アメリカの建国の精神である自由と幸福の追求と個人の尊厳は、意識的に注意深く守られねばならない。油断していれば、内部から浸食されるものなのだ。ゲイル・ワイナンドの新聞社が、エルスワース・トゥーイーと、その配下の者たちに乗っ取られたように。ローズヴェルト政権の内部にはソ連のスパイが多くいたように（Romerstein & Breindel, 2001, 696-820）。

## 5.2 「近代」讃歌

とはいえ、『水源』は、アメリカ的価値を祝福する「アメリカの国民文学」の枠内だけにおさまるものではない。この小説が提示しているものの中でも

っとも重要だと筆者が考えるのは、ルネサンス以来の人類に課せられ、かつ、21世紀の今でも継続中の大きな思想的運動である。それは、いかなる思想運動であろうか。

『水源』において何よりも批判されているのは、集団主義や利他主義ではない。それらの前提となる人間蔑視と人間の可能性の否定が、もっとも批判されている。アイン・ランドは、人間など神の前では無力な存在であり、自己の努力で向上できるような可能性は人間にはなく、人間は本質的に欠如をかかえる罪深い存在と考えるビューリタンの(カルヴィニズムの)人間観を、断固として拒否する。

既存の宗教一般や道徳は、他者への奉仕を称揚する。そのような社会においては、個人が自分自身の幸福を追求することは不道徳な利己主義ということになる。しかし、利他的な社会を理想とすることは、大多数の幸福という大義のために集団主義に陥り、個人を抑圧する。社会の進歩と発展に貢献できるような発明や創造や改革は、他人と同じことをしたがる人間によって生み出されるものではない。それらは、その発明や創造や改革を自己の幸福として自由に追求できる突出した個人によってもたらされる。集団に埋没するセコハン人間が1億人集まっても、イノベーションは生じない。集団主義は、結局は社会の停滞を招く。

そもそも、自己の尊厳を信じ、自らが望む人生を創造することが悪とされるのならば、人間の生そのものが無意味だ。人間は、国家とか血縁共同体とか地縁共同体とか利益共同体の中で生きていく社会的存在ではあるが、同時に、あくまでも個人だ。自分自身のみが人間が所有しているものである。その個人の個別の幸福が否定され、個人は集団のために、他者のために生きるのが道徳とされるのならば、人間個人には生きる喜びがないということになる。

ロークは、「文明というのは、個人が個人であることができる社会建設に向かって人間が進歩する過程です。野蛮人とは、その存在のありようが、丸ごと属する部族の掟に支配される大衆そのものです。文明とは、人間を人間から解放する進歩の過程なのです」(Civilization is the progress toward a society

of privacy. The savages' whole existence is public, ruled by the laws of his tribe. Civilization is the progress of setting men free from men) (Rand, [1943], 1993, 683)と、小説終盤の裁判で述べる。

ロークが述べるように、個人が集団主義から解放され、個人が個人であることができるような社会を実現するために、ルネサンスがあり、啓蒙思想が生まれ、市民革命が起きた。「近代社会」というものを、まがりなりにも実現させるために、何千年という歳月を人類は費やしてきた。いや、何万年かもしれない。この意味で、『水源』は「近代を祝福する物語」なのだ。

だから、『水源』は、「近代人」(Modern Man)という人間モデルを、人間のあるべき姿(paragon)として、臆面もなく祝福する。その「モダン・マン」のハリウッド像に見えかねないハワード・ローク像は、大いに時代錯誤に見えるかもしれない。それは、私たちが、20世紀のモダニズム文学やアカデミズムが流布してきた個人の自立性を解体する言説に洗脳されているからだ。人間の欲望は他者の欲望であり、人間の自我は社会的歴史的に構築されるものであり、主体も自由意志も幻想であるというのが、20世紀が到達した認識であった。その時代風潮に抗い、ランドは、『水源』において、明確すぎるほどに、個人の自立性や主体性や自由意志を寿いだ。

ハワード・ロークという主人公は、「人間を英雄的な存在と考え、かつ自らも英雄的である人間であり、自分を幸福にすることこそ人生の道徳的目的であると考え、だからこそ、どんなに傷ついても、その傷を心の奥底までは届かせない人間であり、人間のもっとも気高い活動は、生産性ある仕事を理性を駆使して実践することであり、かつ地球の事物に働きかけることによって何か価値あるものを生産する人間の理性を絶対的なものとする人間」である。この人間像こそ、「近代人」である。人間の無力さを前提とし、人間を救済する神を待ちながら、所与の環境を宿命として受け入れる「中世人」「前近代人」ではない。思考と労働によって環境に働きかけることによって環境をより良く変えるのが「近代

人」ならば、ロークは、まさしく典型的「近代人」である。この意味で、『水源』は、「近代讃歌」であると同時に、「近代人讃歌」である。

「近代」という思想運動は、まだ終わっていない。「近代人」であることを人間の常態としたい人間解放運動は、まだ終わっていない。ルネサンスから宗教改革を経て啓蒙思想を通過し、現代にいたるまで継続中である。私たちは、人類史において、まだそのような水準にしか達していない。したがって、『水源』を読む意義は、残念ながら(?)、まだまだ大きいのだ。

### 5.3 白人内民族/階級闘争と結社へのユダヤ人的憧憬

アイン・ランドは自分がユダヤ人であることについて、ほとんど語らなかつた。ユダヤ人問題について書くこともなかつた。しかし、それは、ユダヤ人であることが彼女にとって問題ではなかつたということの意味しない。本論2.3で言及したように、アメリカに渡った直後に、自分の名前を非ユダヤ的どころか、出身国が不明で、かつ性別もわからないようなAyn Randという名に改名したことは、彼女にとってユダヤ人であることが重い問題であったことの証左だ。言及されないこと、語られないことほど、雄弁に語るものはない。

周知のことだが、ユダヤ人は、セファルディム(Sephardim)とアシュケナジム(Ashkenazim)に分かれる。ユダヤ王国が滅亡してからユダヤ人の一部は、イベリア半島に逃れ、しだいにスペイン王朝の税務官などを務めるようになり、王朝内部に貴族のような立場を築いていった。彼らが、セファルディムと呼ばれるユダヤ人である。彼らのなかには、スペイン王朝の支配下にあったオランダに移住した者もいた。オランダ人となったユダヤ人の中には、新大陸のアメリカに渡り、財を築いた者もいた。アメリカ合衆国におけるセファルディムはエリート層のなかにも多く存在する(Birmingham, 1997)。

しかし、アイン・ランドは、ロシアや東欧に多く居住していたアシュケナジムである。アシュケナジムは、アメリカ合衆国においては、「食い詰

めてやってきたユダヤ人移民」として差別を受けた。同じユダヤ人のセファルディムからも、「独立以前からアメリカにいた由緒正しいユダヤ人ではなく、後発の貧しいユダヤ人」として差別された(Birmingham, 1997, 330-40)。ランドが、アシュケナジムであったことの意味は、語られなかつたからこそ大きい。

『水源』は、アメリカはニューヨークを舞台にし、高層建築(skyscraper)などアメリカの事物に満ち満ちた「アメリカの小説」(an American Novel)である(Uyl, 1999, 104-108)。なのに、移民国家アメリカを描いているのに、『水源』において、登場人物の人種や民族に関して、ランドは全く言及しなかつた。

しかし、主人公のハワード・ロークは、姓とオレンジ色の髪から判断して、明らかにアイルランド系である。日照時間の短さのために、アイルランド人やスコットランド人に赤毛の保有率が高いことは良く知られている。『水源』を、ランドは夫のフランク・オコーナーに捧げているが、フランクはアイルランド系であった。ランドとフランクの結婚は、欧米白人社会の中の被差別民であるユダヤ系と、「白人の黒人」と呼ばれ、英国系から差別されてきたアイルランド系の結婚である。

この小説は、白人の黒人として差別されてきたアイルランド系アメリカ人が、自らの才能と勤勉によってのみ、英国系プロテスタント(WASP: White Anglo Saxon Protestants)主流のアメリカ社会に挑み成功する物語なのだ。建設現場で作業員として働きながら大学で建築を学んでいたのに、退学になった青年の成功物語は、「白人内民族/階級闘争」として読める。ロークを迫害することになる人々の名前の多くが英国系であることに注目しなければならない。

アイン・ランドが、『水源』の中で、有能さや仕事に対する真摯な献身を美德として称揚するにはわけがある。近代の市民革命とは、他人の生産するものに寄生して生きる王や貴族ではなく、自らが生産する市民が主体的に運営するというシステムである(ということになっている)。原理的には、近代市

民社会の成員は、市民としての義務を果たしている限り、市民としての権利を保障される。人種や民族などの出自によって、その権利が侵害されることはない。人類が、そのような市民社会を形成するには、長い長い時間を要した。人類が、そのような市民社会を形成すること、それが「近代化」であった。

ヨーロッパ社会が「近代化」することは、ユダヤ人の悲願であった。仕事能力によって社会の正規の一員となり社会運営に参画することは、国土を持たず、外国で居場所を確保せざるをえなかったユダヤ人の生き残りの道だった。生きるためには、ユダヤ人は有能でなければならなかった。アイン・ランドが「近代讃歌」とも読める『水源』を書いた背景には、彼女のユダヤ人性が明白に関係している。

同じ文脈から、『水源』に描かれるロークを中心とした建築に従事する男たちの連帯についても注目すべきだ。モナドノック溪谷保養地建設にあたって、ロークの仲間や、かつてのロークの部下たちが建設工事現場に集結し、粗末な小屋に宿泊して作業を敢行するという美しいシーンがある。それは明らかにフリーメイソンリーのロッジ (lodge) の比喩だ。

言うまでもなく、フリーメイソンリーは、中世ヨーロッパにおける専門技術者集団＝石工の組合から始まり発展した結社だ。現代では、フリーメイソンリーは、社会的成功者たちの相互扶助組織に変化して久しいのではあるが、今でも、フリーメイソンリーのシンボルマークは、コンパスに定規である。コンパスと定規を使って建築作業を石工たちがしたからだ。フリーメイソンリーの会員フリーメイソンが集まる集会所は、「ロッジ」と呼ばれる。それは、かつて、各地から集まった石工たちが石造建造物の建築中に寝泊りした合宿所「ロッジ」に由来している。

中世の「石工」(mason) とは、現代で言えば建築家だ。ロークは、「自由な建築家」である。つまり「現代の自由な石工」である。「石」とか、大建造物の工事中に集まる「石工」たちのイメージは、『水源』の中に多く発見できる。まず、この小説の

冒頭に出てくるイメージは「花崗岩」である。ロークが学んだスタントン工科大学の建物はもちろん石造だが、小説の始めあたりに、この石造の建築物が、「中世の要塞」に似ているものとして描写されている。さらにゴシック様式のチャペルも描写されている。この小説は、冒頭から実に「フリーメイソンくさい」のだ。

ロークとキャメロンの関係も「フリーメイソンくさい」。二人の関係は、親方 (master) と徒弟 (apprentice) の関係である。単なる教師と学生の関係ではなく、職人同士のそれだ。ロークの親友であり、建設現場で共に働くことになる前述のステイヴン・マロリーは石を彫る彫刻家である。これも現代の石工だ。マイク・ドニガン (Mike Donigan) は電気技師であるが、建設工事の現場でしか働かないのだから、これも現代の石工だ。ガソリン・スタンドと、それに併設される食堂 (diner) の設計をロークに依頼したジミー・ゴウエン (Jimmy Gowen) は自動車整備工であり、これも現代の石工と言えなくもない。また、ロークが採石場で働くのも、恣意的な設定ではない。ロークは、ここでも「石工」となっている。このように、『水源』には、フリーメイソンリーを思わせる設定が数多い。

筆者は、すでに本論2.3において、映画監督のデミルとランドの出会いに関連して、ランドの父親が父方の祖父がフリーメイソンであった可能性について言及した。この結社は、入会儀式が秘密であることから都市伝説的な陰謀論的になってきたが、『水源』におけるフリーメイソンの暗喩は、ランドの「結社」なるものへのユダヤ人としての憧憬があると、筆者は考える。

結社 (associations) は、血縁や地縁により自然発生的にできた共同体、ゲマインシャフト (Gemeinschaft) ではない。目的を共有した機能体組織、利益共同体、ゲゼルシャフト (Gesellschaft) である。出自ではなく、何をするのか、何ができるのかが、ゲゼルシャフトへの入会の決め手になる。ゲゼルシャフトの典型である結社フリーメイソンリー的なものへのランドの暗黙の言及も、やはり彼女がユダヤ人であったことから生じている。『水源』の作者は、仕

事能力によって社会の正規の一員となり、社会運営に参画し、有能でなければ、勤勉でなければ、能力によって判断されるシステムでなければ生き残れなかったユダヤ人のひとりであった。このことは、『水源』を理解する重要な鍵である。

#### 5.4 フェミニスト・ファンタジー

『水源』は、フェミニズム小説でもあることは指摘しておかねばならない。ただし、アイン・ランド自身は、自分をフェミニストであると言ったことはなかった。フェミニズム運動にも理解はなかった。しかし、彼女が『水源』において創造したヒロインは、どうしてもなくフェミニスト的である。

ドミニクは、1922年から1940年までを舞台にするアメリカにおいて、男に扶養される必要のない「ブルジョワ」という設定で造形されている。「ブルジョワの娘」でも「ブルジョワの妻」でもない。母の遺した遺産があるので、あらかじめ経済的に自立しているという設定である。ドミニクは父に服従する必要もないし、ほんとうのところは、『パナ新聞』社で記者として働く必要もない。誇り高い強固な自我の持ち主なので、結婚も離婚も彼女の存在様式に影響を与えない。

ロークとの最初の性交渉は、彼女の別荘に侵入したロークによる強姦で始まったが、そのことが彼女のトラウマになるわけではない。強姦で傷つき「犠牲者」になるほどドミニクはひ弱ではないという設定は、フェミニズム的には言語道断な設定である。実際のところ、この小説は、この強姦シーンのために、ある種のフェミニストたちから批判をうけてきた (Brownmiller, 1993, 313-15)。フェミニストばかりでなく、宗教的保守派からも非難されてきた (Bernstein, 2007, 208)。

確かに、『水源』出版の1943年時点において、ドミニクは言語道断に破天荒なヒロインである。ロークと性交したいときは、自分から彼の部屋や仕事場に出かけ欲望を率直に表明する。「淑女」を演じるような打算や気取りはドミニクには必要ない。彼女は、キーティングと離婚しワイナンドと結婚するときは、有名建築家からアメリカ屈指の新聞王に乗

り換えたということで悪評を受けるが、全く無頓着である。ワイナンドと離婚するときは、ロークが借りていた山荘に泊まり、翌朝に警察に電話して、「ワイナンド夫人」として、あからさまに堂々と盗難にあったと被害を申し出て、故意に新聞に書きたてられるようにする。自分の不倫を新聞沙汰にする。そのためにワイナンドはドミニクと離婚せざるをえなくなる。しかし、それまでのワイナンドたたきは、悪女ドミニクたたきにシフトしたので、ワイナンドの社会的生命は保たれた。

このヒロインは、犠牲者になることを絶対に拒否する。このヒロインは、「女性嫌悪」(misogyny)を内面化し、自己嫌悪と自己否定に苦しむことはない。「女性嫌悪」を他の女に投影して、同性を軽蔑し、同性に無意味な敵意を向けることもない。くり返しになるが、『水源』が1943年に発表されたものだというのを忘れてはいけない。このような女性像が、当時いかほどに破天荒だったことか。

もちろん、このようなヒロインを提示されても、女一般をめぐる社会的不正に満ちた現実が是正されるわけではない。現実逃避用のスーパーウーマン幻想が、ひとつ増えるだけだ。しかし、フェミニズムの浸透には、女の厳しい状況を直視すると同時に、自己確信を女性読者に内面化させるための強力なイメージが必要である。

アイン・ランドは、1920年の女性参政権獲得により運動の中心点をなくし、1930年代の大恐慌の嵐の中に退潮した第一波フェミニズムと、1960年後半から始まった第二波フェミニズムの間という端境期に、過激な英雄的ヒロインを造形した。彼女の提示したヒロイン像が、第二波フェミニズムを受容することになる女性たちに、影響を全く与えなかったとは考えられない (Taylor, 1995, 231-49/藤森, 2001, 119-23)。

## 6 結論--文学と政治のジレンマから「客観主義」へ

アイン・ランドは、『水源』出版から3年経過した1946年5月4日の日記に次のように書いている。

In my own case, I seem to be both a theoretical philosopher and a fiction writer. But it is the last that interests me most; the first is only the means to the last; the absolutely necessary means, but only the means; the fiction story is the end. Without an understanding and statement of the right philosophical principle, I cannot create the right story; but the discovery of the principle interests me only as the discovery of the proper knowledge to be used for my life purpose, and my life purpose is the creation of the kind of world (people and events) that I like, i.e., that represents human perfection. Philosophical knowledge is necessary in order to define human perfection, but I do not care to stop at the definition; I want to use it, to apply it in my work (in my personal life, too—but the core, center and purpose of my personal life, of my whole life, is my work). (Rand, 1999, 479)

(私の場合、理論的思想家であるし作家でもあるみたいだ。だけど、私をもっともひきつけるのは作家のほうだ。思想家のほうは作家であるための手段でしかない。でも絶対に必要な手段だけど、それでも手段にしかすぎない。作家が目的なんだから。正しい哲学的原則をちゃんと理解して述べなければ、正しい物語は生み出せない。それでも、私の人生の目的のために使用される妥当な知識を見出すために、哲学的原則を見つけることだ。私の人生の目的は私が好きな世界を創造することだもの。つまり、人間の完璧さを表現する世界。そういう世界。哲学的知識は、人間の完璧さを定義するために必要。だけど、私は定義しただけで、そこでとまる気はないから。私は、私の作品に適用させるために、哲学的知識を使いたい。私の個人的生活においても。だけど、私の個人的生活、私の人生全体の核心は、中心にあるのは、目的は、私の作品。)

このように、哲学的知識というものは、彼女にとっては、作家としての自らが創造する「自分が好きな世界」と、自分が表現したい「人間の完璧さ (human perfection)」を明確に定義するための手段だった。哲学そのものは二次的なものであった。

また、『肩をすくめるアトラス』出版からかなり経過した1969年に発表された『ロマン派宣言』(*The Romantic Manifesto*)というエッセイ集におさめられた「私を書く目的」("The Goal of My Writing")という文のなかでは、このように書いている。

The motive and purpose of my writing is the projection of an ideal man. The portrayal of a moral ideal, as my ultimate literary goal, as an end in itself—to which any didactic, intellectual or philosophical values contained in a novel are only the means. Let me stress this: my purpose is not the philosophical enlightenment of my readers, it is not the beneficial influence which my novels may have on people, it is not the fact that my novels may help a reader's intellectual development. All these matters are important, but they are secondary considerations, they are merely consequences and effects, not the first causes or prime movers. (Rand, [1969], 1971, 162)

(私が書くことの動機と目的は、理想的な人間を表出することである。道徳的な理想を描くことである。私の究極の文学的目標として、それ自身を目的として。小説に、教訓的な知的な哲学的な価値観が表現されているとしても、それがどんなものにせよ、理想的な人間を表出するための手段でしかない。このことは強調させていただきたい。私の目的は、読者を思想的に啓蒙することでは断じてない。小説が人々に与える有益な作用を、私は目的としていない。私の小説が読者の知的成長を手助けする可能性があるという事実が目的でもない。これらのことは重要なことではあるが、考慮するとしても二次



的なことであり、単に結果であり効果でしかなく、第一の原因でもなく最初の動機でもない)

ランドは、『肩をすくめるアトラス』出版の1957年以降は、「客観主義」伝播のための哲学的エッセイ執筆や講演活動に集中したのだが、『水源』出版から間もない1946年においても、小説を書かずに「客観主義」に関するエッセイを書いていた1969年においても、一貫して、哲学そのものを書きたいことではないと言っている。知的にも情緒的にも道徳的にも自分が理想と思える人間が登場する物語を書きたいだけだと言っている。読者への啓蒙とか使命感からではなく、自分が憧れてやまない人間を表現したいから小説を書くのだと言っている。自分が、そういう人物に会いたいから書くのだと告白している。作家として、ランドは、非常に正直で素朴だった。

まさに『水源』の主人公ハワード・ロークこそ、ランドにとって理想の人間像であった。ランドは、1963年に発表したエッセイ集『新しい知識人のために』(*For the New Intellectuals*)の「まえがき」において、次のように書いている。「私の哲学は、本質的には、以下のようなものだ。人間は英雄的な存在だ。幸福は、人間の人生の道徳的目的だ。人間のもっとも高貴なる活動は、生産性の高い仕事を成し遂げることだ。理性こそが、人間の唯一絶対的に重要なものだ」(My philosophy, in essence, is the concept of man as a heroic being, with his own happiness as the moral purpose of his life, with productive achievement as his noblest activity, and reason as his only absolute) (Rand, 1961, iii) と。この哲学を体現するのが、『水源』の主人公ハワード・ロークだ。

しかし、ランドは気づかざるをえなかった。理想の人間像を描くだけで事足りるのか？たとえば、小説のクライマックスであるコートラント・ホームズ爆破事件の裁判の勝利は、ロークが理想的な人間であるから獲得したのか？たまたま陪審員がロークの弁明に説得されたからロークは無罪になった。アメリカのような陪審員制度のもとでは、既成の法律の

もとでは有罪とされるような事例でも、陪審員の共感を獲得すれば、超法規的に無罪とされるという事例もまれにはあるだろう。だから、ロークが無罪になったことは、必ずしも荒唐無稽なことではない。十分にリアルなことだ。

しかし、問題はそこではない。ロークは、陪審員という他人に自分の運命を委ねなければならなかった。ロークが、自分の運命を自分で決めたわけではない。ここが問題なのだ。つまり、『水源』における理想的人間は、結局は、その運命を社会に左右された。他人に左右された。ここに、この小説の弱さがある。自己欺瞞がある。ご都合主義がある。

言い換えれば、『水源』は、幸福な結末で終わるのではあるが、美德を持った人間が、腐敗した社会の中で、どう生き残るのか、という問題について答えていないのだ。理想の人間像を造形しただけでは、足りない。理想の人物が、彼の理性によって判断した行為が違法とされるような環境で生きる場合は、その人物は犯罪者となる。それでいいのか。物語の世界ならば、理解ある陪審員が彼を無罪にするのかもしれない。しかし、そのような偶然や恣意に委ねられる理想的人間とは何者であろうか。それは、やはり犠牲者であろう。

ロークは、裁判によって有罪となり刑務所に入っても構わない。それがアメリカという社会が自分に求めることならば受け容れると裁判で述べるが、そのような姿勢は潔いとも見えるが、自分が犠牲者であるという事実を心理的に抑圧し直視しないだけのことだ。

ここに「政治」の問題が入り込んでくる。「文学」の世界に「政治」の問題が入り込んでくる。理想的な人間が生きることができるシステムが構築されねば、理想的な人間は理想的人間ではいられない。ならば、どのようなシステムならば、ランドが思う理想的な人間は、理想的人間として生きることができるのだろうか。

アイン・ランドは、『肩をすくめるアトラス』において、腐敗したアメリカを捨て、コロラド山中に新世界を構築する人々を描いた。その世界に貫徹する思想が「客観主義」であった。ここで、「客観主

義」が、いかなる思想なのか再確認してみよう。

「客観主義」は、形而上学的には客観的現実 (objective reality)、認識論的には理性 (reason)、倫理的には自己利益 (self-interest)、政治的には自由放任資本主義 (laissez-faire capitalism) の立場を採るといえる。以下は、アイン・ランドの哲学「客観主義」(objectivism) の内容を、筆者がまとめたものである。

(1) 人間は生き物である。生き物である以上は、生き延びることが目標である。人間が生き延びることに益になるものは「善」であり、人間が生き延びるのに障害になるものは「悪」である。生き延びることに利益になることを求めなければならないという意味において、人間は利己的であらねばならない。一般的に言われる利己主義の意味は、「欲望のおもむくままに生きること」であるが、利己主義の本来の意味は「自己に利益があるようにすること」である。「欲望のおもむくままに行動すること」は自己利益に反するので、真の利己主義ではなく、単なる気まぐれである。

(2) 人間が生き延びるといえることは、どういうことか。現実には人間の思惑とは関係なく存在する客観的実体である。人間は、現実を認知し把握することができるが、それを創造することも変えることもできない。たとえば、人間が水を望んでも水は出現しない。水のある場所まで移動しなければならない。人間は植物ではないから、移動せずとも日光や土中の栄養素を吸収して生き延びることはできない。人間は、本能の中に生き延びるための行動がプログラミングされていない。獣のように身体能力が高いわけでもない。人間の場合は、すべて学習しないと、生き延びることができない。脳の力、思考力だけが、人間の持つすべてだ。人間は、思考力によって、自分の欲望や願いでは変わらない現実には働きかけ、自らにとって価値あるものを獲得したり生産することによって生き延びる。人間の英雄性は、このような生産性にある。

(3) 思考とは何か。人間の諸感覚が捉えた事物をそれと確認し (identify)、他の事物と関連付け統合する (integrate) 過程が思考である。この思考を稼働させる機能が理性 (reason) である。理性だけが、人間が客観物である世界に対処して生き抜く知識を獲得する手段であり、行動への適切な指針である。頭脳と身体を適切に使って現実に対処し、自分が生き延びるために利益になるものを入手できれば、その思考と行動は合理的である。それに失敗するのは思考と行動が合理的でなかったということである。思考と行動において合理性がないと、しかも長期的視野に基づいた合理性がないと、人間は生き延びることができない。

(4) したがって、信仰や感情を知識獲得の手段とする神秘主義や、確実な知識は人間には獲得不可能なものという懐疑主義は否定される。また、人間存在が、運命とか育ちとか遺伝子とか経済状況の犠牲者であるとする決定論も否定される。人間の生は、客観的実体である現実に対処して、生き延びることに利益になることを選択し実践するという合理的な思考と行動の蓄積であって、それ以外のものではない。

(5) そういう存在としての人間が、そういう存在としての人間と関わるということは、互いの合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものを、合意の上で交換するという関係でなければならない。互恵的関係でなければならない。したがって、正しい人間関係は、すべて交易者、商人 (trader) の関係である。愛情関係や友情関係も、互いが生み出した価値の交換関係である。この意味において、「無償の愛」はありえない。「利他主義」はありえない。ありえない利他主義を推奨する人々は、他人が生み出した価値と交換されるにふさわしい価値を生産し提供することなしに、他人が生み出した価値を手にした「たかり屋」か、「搾取者」か、「寄生虫」である。

(6) 上記のような人間の条件と人間関係のあり方

を守ることが道徳であるが、この道徳の実践を擁護する経済体制は資本主義である。個人と個人の間の合意のうえでの交換関係、合理的な自己利益に基づく交換行為に干渉し規制する体制は邪悪である。したがって、自由放任資本主義が道徳的経済体制である。ただし、資本主義はいまだ完全には実現されたことがない「未来のシステム」である。なぜならば、道徳の実践の不足により、互恵的交換関係ではない、利他的な搾取関係は、いろいろな形で残っているからである。世界史上初めて、資本主義社会として建国されたアメリカ合衆国も、混合経済や経済統制をまぬがれていないからである。

(7) この道徳の実践を擁護し、個人の生き延びる権利と、それに伴う所有権を保護する政治体制は、夜警国家である。合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものに対する個人の所有権が守られないということは、人間の生そのものが冒涇されることである。それらの個人の諸権利の侵害は、具体的には物理的強制力（暴力）の行使によるので、政府は、物理的強制力（暴力）の行使を抑止する物理的強制力（暴力）を持たなければならない。その力の行使は、恣意的であってはいけない。個人の諸権利を侵害する暴力に報復し反撃するときのみ、力の行使がゆるされる。

(8) 物理的強制力からの脅威がなければ、生き延びるために合理的で長期的視野に基づいた自己利益のための活動に人々は専心できる。そのような人間で成立する自由な社会は発展し繁栄する。それ以外のことに政府が介入し規制することは、国民の合理的な思考と行動の自由な実践を抑圧する。ひいては、それらの自由な実践によって形成される自由で豊かな社会の発展を阻害する。統治機関による規制は、その規制行為に従事する官僚組織の肥大を招き、税金公金浪費が増大する。そもそも、政府運営資金は、政府が提供するサービスに対する国民からの「自主的支払い」である（べきだ）。略奪者による物理的強制力（暴力）

を抑止する公的機関である裁判所と警察と軍の運営に対する「自主的支払い」である（べきだ）。国民の収入は政府や官僚の所有物ではない。

「公」とは、政府や官僚組織に属する個人の私物に転化する危険が常にある。政府や公的機関が、国民にとって最大の略奪者にならないように、最悪最強の暴力団にならないように、私人である個人の国民は常に警戒しなければならない。

以上のように、「客観主義」は、明確に、具体的に、実現させるべき政治体制や経済体制を示す思想だ。それが適切であるか、実現性があるのかは、ここでは論じない。把握しておくべきことは、このような思想にアイン・ランドが至ったのは、『水源』を書くことによって、彼女が文学と政治のジレンマに陥り、政治を選んだ、ということである。

ただ「理想的な人間を表現しただけ」だった作家が、ハワード・ロークという人物を生き生きと描きたかっただけの文学者が、その作業を通じて、「その理想的な人間が生き生きと生きることができシステム」を思考せざるをえなくなった。巨大な政治経済小説『肩をすくめるアトラス』を書かなければならなくなった。この意味で、『水源』は「客観主義」の胎芽となった。

#### 参考文献

- Berliner, Michael S. 2007. "Howard Roark and Frank Lloyed Wright," *Essays on Ayn Rand's The Fountainhead*. Lanham: Lexington Books, 41-64.
- 2007. "The Fountainhead Reviews," *Essays on Ayn Rand's The Fountainhead*. Lanham: Lexington Books, 77-83
- Bernstein, Andrew. 2007. "Understanding the 'Rape' Scene in *The Fountainhead*," *Essays on Ayn Rand's The Fountainhead*. 201-208.
- Birmingham, Stephen. 1997. *The Grandess: America's Sephardic Elite*. Syracuse University Press.
- Branden, Barbara. 1986. *The Passion of Ayn Rand*. New York: Doubleday.

- Branden, Nathaniel. 1999. *My Years with Ayn Rand*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Britting, Jeff. 2004. *Ayn Rand* (Overlook Illustrated Lives Series). New York: Overlook Duckworth.
- Brownmiller, Susan. [1975], 1993. *Against Our Will: Men, Women, and Rape*. New York: Bantam Books. New York: Ballantine Books.
- Burns, Jennifer. 2009. *Goddess of the Market: Any Rand and the American Right*. New York: Oxford University Press.
- Chace, Richard Volney. 1957. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday.
- Heller, Anne C. 2009. *Ayn Rand and the World She Made*. New York: Doubleday.
- Johnson, D. Barton. 2000. "Strange Bedfellows: Ayn Rand and Vladimir Nabokov," *The Journal of Ayn Rand Studies*, Vol.2, No.1 (Fall), 47-67. University Park, PA: Pennsylvania State University Press.
- Johnson, Donald Leslie. 2005. *The Fountainhead: Wright, Rand, the FBI and Hollywood*. Jefferson: McFarland & Company, Inc., Publishers.
- Laski, Harold. [1930], 1949. *Liberty in the Modern State*. Augustus M Kelly Publishers. ハロルド・ラスキ著 飯坂良明訳 『近代国家における自由』 岩波書店.
- Merrill, Ronald E. 1991. *The Ideas of Ayn Rand*. Chicago: Open Court.
- 2013. *Ayn Rand Explained: From Tyranny to Tea Party*. Chicago: Open Court.
- Milgram, Shoshna. 2007. "The Fountainhead from Notebook to Novel: The Composition of Ayn Rand's First Ideal Man," *Essays on Ayn Rand's The Fountainhead*. Lanham: Lexington Books, 3-40.
- Peikoff, Leonard. 1991. *Objectivism: The Philosophy of Ayn Rand*. New York: E.P. Dutton.
- Podrisky, Marlene & Peter Schwartz. 2009. *Objectively Speaking: Ayn Rand Interviewed*. Lanham: Lexington Books.
- Ralston, Richard E. 2007. "Publishing the Fountainhead," *Essays on Ayn Rand's The Fountainhead*. Lanham: Lexington Books, 65-75.
- Rand, Ayn. [1936], 1996. *We the Living*. New York: Macmillan. New York: New American Library. アイン・ランド著, 脇坂あゆみ訳 『われら生きるもの』 ビジネス社, 2012.
- [1936], 1971, 1987. *Night of January Sixteenth*. New York: Longman. New York: New American Library. New York: Plume.
- [1943], 1993. *The Fountainhead*. Indianapolis: Bobbs-Merrill. New York: New American Library. アイン・ランド著, 藤森かよこ訳 『水源』 ビジネス社, 2004.
- [1946], 1995. *Anthem*. Los Angeles: Pampheteers, Inc. New York: New American Library.
- [1957], 1992. *Atlas Shrugged*. New York: Random House. New York: New American Library. アイン・ランド著, 脇坂あゆみ訳 『肩をすくめるアトラス』 ビジネス社, 2004.
- 1984. *The Early Ayn Rand: A Selection from Her Unpublished Fiction*. New York: New American Library.
- 1961. *For the New Intellectual: The Philosophy of Ayn Rand*. New York: New American Library.
- 1964. *The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York: New American Library. アイン・ランド著, 藤森かよこ訳 『利己主義という気概』 ビジネス社, 2008.
- 1967. *Capitalism: The Unknown Ideal*. New York: New American Library.
- [1971], 1975. *The New Left: The Anti-Industrial Revolution*. New York: New American Library.
- [1982], 1984. *Philosophy: Who Needs It*. Bobbs-Merrill. New York: New American Library
- 1991. *The Ayn Rand Column*. New Milford: Second Renaissance Book.
- 1997. *Letters of Ayn Rand*. Ed. Michael S. Berliner. New York: Plume.
- 1999. *The Ayn Rand Reader*. Ed. Gary Hull and

- Leonard Peikoff. New York: Plume.
- 1999. *Journals of Ayn Rand*. Ed. David Harriman. New York : Plume.
- Romerstein, Herbert & Eric Breindel. 2001. *The Venona Secrets: Exposing Soviet Espionage and America's Traitors*. Washington DC: Regnery Publishing, INC.
- Sciabarra, Chris Matthew. 1995. *Ayn Rand, the Russian Radical*. University Park: Pennsylvania State University Press.
- Szalay, Michael. 2000. *New Deal Modernism: American Literature and the Invention of the Welfare State*. Durham & London: Duke University Press.
- Taylor, Joan Kennedy. 1999. "Ayn Rand and the Concept of Feminism: A Reclamation," *Feminist Interpretations of Ayn Rand* ed by Mimi Reisel Gladstein & Chris Matthew Sciabarra. University Press: Pennsylvania State University Press.
- Uyl, Douglas J. Den.1999. *The Fountainhead: An American Novel*. New York: Twayne Publishers.
- 植田樹. 2014. 『ロシアを動かした秘密結社---フリーメイソンと革命家の系譜』彩流社.
- 鈴木輝二. 2003. 『ユダヤ・エリート---アメリカへ渡った東方ユダヤ人』中央公論社.
- サリヴァン, ルイス・H. 竹内大・藤田延幸共訳, 1977. 『サリヴァン自伝---若き建築家の肖像』鹿島出版会.
- 副島隆彦. 1999. 『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』講談社.
- 副島隆彦 & SNSI副島国家戦略研究所. 2014. 『フリーメイソン=ユニテリアン教会が明治日本を動かした』成甲社.
- 藤森かよこ, 2001. 「危険なフェミニストの冷戦ナラティブ---アイン・ランドの『水源』」山下昇編著 『冷戦とアメリカ文学---21世紀からの再検証』世界思想社. 100-25.
- , 2012. 「アメリカにおける保守主義の誕生とアイン・ランドの交点」『都市経営』(福山市立大学都市経営学部) 1号, 5-20.
- 2013a. 「アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』」『都市経営』(福山市立大学都市経営学部) 2号, 113-28.
- 2013b. 「衝動から思想へ---アメリカ保守主義の誕生とハイエク『隷属への道』」『都市経営』(福山市立大学都市経営学部) 3号, 11-28.
- 2014. 「アイン・ランドのアメリカ保守主義批判」『都市経営』(福山市立大学都市経営学部) 6号, 11-28.
- 水谷三公. 1994. 『ラスキとその仲間---「赤い三〇年代」の知識人』中央公論社.

## Ayn Rand's *The Fountainhead* as The Roots of Objectivism

Kayoko FUJIMORI

Ayn Rand identified the theme of *The Fountainhead* (1943) with "individualism versus collectivism", not in politics but within a man's soul. An innovative, independent architect fights a collectivist society; an idealistic heroine is torn between her love for the hero and her withdrawal from values, which she considers are doomed to be ruined by a corrupted society. But the hero wins the battle, defending individual rights, reliance on reason, and the concept of creativity and self-generated action with his own happiness as the moral purpose of his life.

If individualism really is central to Americanism, *The Fountainhead* is the quintessential American novel. If the hero is a romanticized paragon of "modern man," *The Fountainhead* is celebrating modernization as an unfinished project of human liberation which has been in progress so far since it started from Renaissance. Modernization is also the process which enables Jewish people, pariahs in Europe to survive the discriminative society. In this view, *The Fountainhead* is truly a Jewish novel. Although Ayn Rand herself rejected the label "feminist" and condemned strong strands of collectivism in feminist movements, *The Fountainhead* is a pre-feminist novel with the heroine who is superior to men in ability, intelligence and integrity.

Several of the basic ideas of Objectivism, which Ayn Rand called her philosophy, are explicated in *The Fountainhead*. But this novel fails to present a convincing solution about the survival of reason and heroic achievement in a hostile world. How can the good man live in an evil, corrupted society? Thus politics became to matter for Rand.

Keywords : Objectivism, individualism, collectivism, modernization, Jewishness